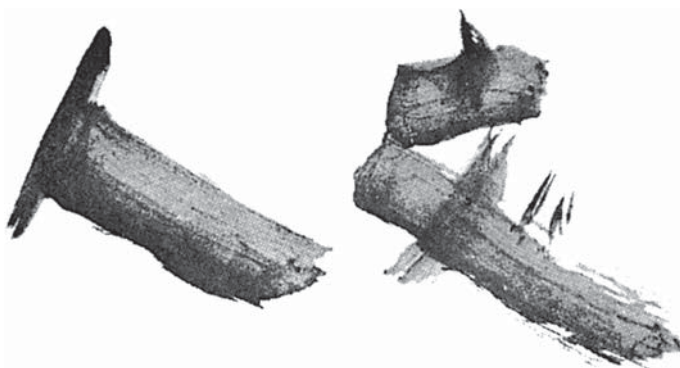




第五七号



2010

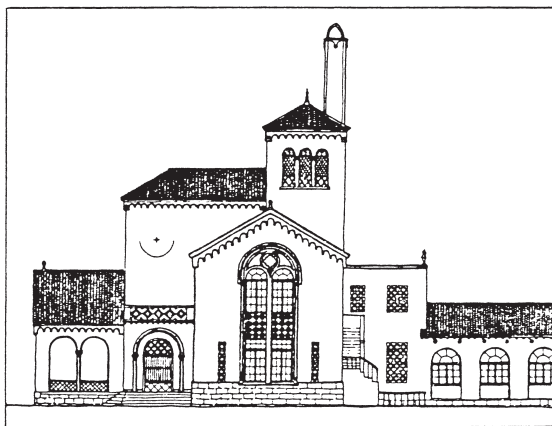
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第五七号

2009年4月—2010年3月

も く じ



随想

ハゲの価値を見直そう

田中 淡

外国人研究員の京都

田村 恵子

講演

夏期公開講座

貧民窟の食生活——松原岩五郎『最暗黒の東京』（藤原

辰史）／巡礼と都市——ナーセレ・ホスロー『旅行記』

を読む——（稲葉 稔）／都市を徘徊する——ポー『群

衆の人』の世界（富永茂樹）

創立八〇周年記念

創立八〇周年記念式典における式辞（水野直樹）／創立

八〇周年記念シンポジウム／資料の行方——探検してわ

かったこと、わからなかったこと——（菊地 暁）

彙報

共同利用・共同研究拠点

共同利用・共同研究拠点の活動を開始

共同研究の話題

「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」

フィクション論のわかりにくさ

大浦 康介

石窟研究の「うち」と「そと」

安藤 房枝

西部戦線戦跡旅行準備次第

伊藤 順二

パターの輪

藤井 律之

所のうち・そと

古勝 隆一

哈燕を訪ねて

王寺 賢太

考証と検索

田中 雅一

共同研究会三昧あるいは数値化の試み

宮宅 潔

クサンテン考古学公園

宮宅 潔

書いたもの一覧

ハゲの価値を見直そう

田 中 淡

かつて何でも過敏に差別語を禁忌視する風潮がピークに達していたころ、私も出版社から何度かその種の指摘を受けた経験がある。ある著名な作家が広報に原稿を依頼した某中央官庁から文中のことにクレームをつけられ、それならいつそのこと「髪の毛の不自由な方」と改めようかと随筆に書いていたのはとくに痛快だったのを思い出す。ただ、いくら寄る年波で頭のほうも他人事でなく寂しくなったからといっても、表題はその「禿」ではなく、「剥」という字のほうで、身近な例をあげれば、ペンキが剥がれて素の木肌が露出したような状態を指す。

永年撮りためた中国の古建築の写真、とくにカラー写真を整理しながら改めて気づいたことである。写真の内訳を大雑把にいうと、古くは一九七五年、七七年、七九年、最初期の学会調査団による北京・大同・五台山・上海・西安・洛陽・蘇州の代表的な建築の写真に始まり、八一〜八二年、一年間の南京工学院（現東南大学）建築研究所に留学中の山西・河南・河北・四川・雲南など広範囲にわたる大量の調査写真、そして八七年の



晋東南（山西省東南部）、九五年の河北・河南文物調査、福建省等々の地域調査からさらに近年まで、時間的にはかなり長いスパンに及ぶ撮影記録が混在している。そして、そこからは撮影年次が遅くなればなるほど古建築の彩色や扉窓の格子組、屋根瓦や細部装飾がきれいに整っていくという明快な傾向が見てとれる。あまり知られていないことだが、中国に現存する木造建築は、おそらく歴史上政治・戦争の中心地から遠かったためであろう、遼・宋・金・元時代以前、およそ一四世紀前半までの遺構の約七〇パーセントが山西省に集中し、これと隣接する河南省西部、陝西省南部のエリアを加えると、この地域だけで実に全土の八〇パーセントに達する。私の調査対象が山西省全域や河南省西部に偏重しているのは、あくまで実物の残存率との関係なのだが、いま記した調査撮影の当時はいずれもまだまともな調査報告すらなく、したがって日本でいえば国宝・重要文化財に匹敵する寺廟が小学校のグラウンドの片隅にプラスチックバンド楽器や体育の線引き車、石灰の倉庫として、あるいはなかば朽ち果てた塵捨場として、辛うじて存在している状態であった。塵の籠えた臭いを思うと、二度と調査に行くまいと心に決めたほどだったのが、専門家の解説がなければたんなる檻樓屋風景を映したに等しい一群の写真がいまとなつては修理前、整備前の状況を伝える貴重な記録になってしまったのだ。

これまで文章として具体的に書いたことはないけれども、中国の文化財建造物修理の手法は、日本から見れば相当粗っぽく、



技術水準ははっきりいって低劣きわまりない。私が留学した当時はもちろん、その後の調査のときでも、まともな保存修理の事例はほとんど見受けなかったし聞くこともなかった。日本では一定年数を経過した建物はいったん全面的に解体し、詳細な調査にもとづいて補修を加え、再度組み立て直す「解体修理」の手法がとくに普遍的になっているが、中国では「落架大修」とよぶ本格的修理の手法は、北京天壇祈年殿や大同善化寺三聖殿、正定隆興寺摩尼殿のように、破損が甚大で手の施しようがない喫緊の場合を例外として、つい最近まで事例は十指にも満たなかった。

長江以南で年代が最古、五代の遺構である福州華林寺大殿は永らく参観が叶わず、漸く実現したときはすでに落架大修が終わった直後で、しかも中国建築の漆塗りは下地の麻布貼りと下塗りが異様に分厚く、さらに上塗りも厚いから、綺麗に塗り籠められた柱の表面をいくら撫でてみても、上から叩いてみても、柱の木肌は漆下地の厚化粧の下に深く埋もれているので、もともと表面に風触がどの程度あったのかなど知る由もなく、その柱が当初の部材なのか今回の修理で取り替えた新材なのかすら見当がつかなくなっていた。それも、幸運にも大同上華嚴寺大雄宝殿の修理現場で柱の漆塗りが剥げた補修中の事例を見たことがあったから、状況を推察することができたにすぎない。ついでにいうと、このときの福建省古建筑調査で十数年ぶりに見た泉州の寺廟は、八二年留学当時フィールドノートに



私自身が描いた伽藍配置とさえ全然異なり、それが最近の観光整備にもなつて新築された建物で、それが礎石だけの廃墟にもとづいて復元した建物で、本来あつた古建築はこれだけだということがわかるまで相当な時間を要した。中国では、文化財保存とは別に、如何にも昔の建物そっくり本物紛いの建築を設計するのは同じ分野による一種のお家芸であつて、その古蹟に予備知識がなければ区別は不可能だからである。また、遼代の遺構である大同下華嚴寺薄迦教藏殿は、内部に遼代の塑像を安置し、その上に藻井（ドーム型化粧天井）を構成する貴重な実例であつて、当初の古い彩色文様が遺つていゝることも知られる。さすがに殿内の彩色は塑像とともにそのまま保存されているが、七五年、七七年当時に映した外観の彩色は剥げたままで、丹念に調査すれば当初の文様彩色の復元も可能だったはずなのに、八一年撮影の写真にはもはや無惨にも無味乾燥な代赭色一色に塗り替えられた情況が映つてゐる。ことはどさように、調査年月が後になればなるほど、金ピカピカ古建築が増えている。

ところで、想起起こせば、そうした変化は、北京の古書店街として名高い琉璃廠琉璃廠の旧建物が全面的に破壊され、文献史料とも前身建物とも直截的脈絡のない清代絵画の町並み風に新築整備された八二年の復興工事に始まるらしく、その後、太原や天津、重慶など全国主要都市の繁華街に、清代末期風、もつとわかりやすいえば時代劇映画セット風の食品街や商店街ショッピング街が新築されていった。清朝の康熙、乾隆両帝が北京頤和園後山



に江南地方の景観風景を写して築いた町並みを後年復元整備したのも当然そうした傾向と軌を一にする。

私の調査は定点観測というほど大層なものではないが、同じ場所で撮影年次が飛び飛び数回にわたるものが含まれているために、このような各時期ごとの経済政策、文物保護、観光開発の状況を見事に反映する結果となっているのだ。日本の文化財保存や建築史の分野では、解体修理にともない専門家による周到な学術調査を経て、復元、修理、竣工にいたった古建築の形態は、だいたい信用していいという学界暗黙の了解がある。しかし、中国の古建築のペンキ塗り立て風情は、まったく違うという想いを、古い写真を見直しながら新たにしたのである。きわめて遺憾なことだが、中国の寺廟、宮殿の修理、竣工なった極彩色の形態をそのまま信用するのは危険である。ただし、文化財の当初痕跡の保存よりも金ピカピカ仕上りのほうに価値を見いだす——そのこと自体は中国と日本の美意識の相異というきわめて奥の深い主題であって、そう簡単に結論が出る話ではない。もっとも、厚化粧の下に何が隠れているか把みようがないのは建築に限った話ではない。だからこそ、もっとハゲの価値が見直されて当然というべきだろう。



外国人研究員の京都

田村 恵子

大阪の下町で生まれて育った私は、小さい頃によく聞かされたことがあった。京都の人とは結婚するなというのだ。京都には古いしきたりがあって、大阪から嫁入りすると苦労するといふ。どうやら難波女と京男という組み合わせはあまりうまくいかないらしい。ところがそれから年月がたつてみれば、私は京都どころかオーストラリアでイギリス人と所帯をもっており、人文研の「外国人」研究員とし京都に住む機会を二〇〇九年にあたえられた。早春から初夏にかけての京都は美しく、梅に始まりツツジまで花絵巻を十分楽しんだが、例年よりも長く咲いたという四月の桜がなんといっても圧巻だった。研究面では、恵まれた環境で時間が自由に使えるという夢のような機会をいただき、人文研に心より感謝している。さらに今回の滞在では、研究以外でも予想外の出来事があり、あらためて日本人と外国人の狭間で生きている自分の存在を実感させられた。

大学院教育以降をオーストラリアで受けた私は、海外生活のほうが日本での生活年数よりもすでに長くなっている。二〇〇



五年に国際交流基金の招聘で神戸大学に滞在した際も、海外生活が十年以上の日本人という資格だった。その際は、神戸大学の留学生や外国人研究者用の宿舎に入居したので、今回も同じようなタイプの宿舎をと希望した。しかし「残念ながら京大宿舎は抽選で外れました。自分で住むところを探してください」という連絡が届き、キャンベラで連日インターネットのマンズリー・マンションのサイトを覗いて思案する日が続いた。そんな時、ある友人から北山通りの近くに外国人専用の宿舎があるらしいと知らされそのホームページを覗いてみると、世界各国から来たいろいろな人が楽しそうに居間で歓談する写真が載っている。場所は地下鉄の駅から近く環境も良好。その上家賃も格安。ただ台所とシャワーは共同使用という条件だった。神戸大学の宿舎の台所が小さくて使いにくかったので、大きな台所を共同で使うことが出来ればそのほうがベターと理屈をつけて、ともかく一ヶ月分の家賃を前払いして入居したのが、京都に到着後三日目だった。

建物を実際に見て驚いた。昭和の時代、それも私が中学生か高校生くらいだったころにあった学生下宿そのままなのだ。木造モルタル二階建て。一階には、台所、居間、トイレ、シャワーなどの共同設備があり、階段を上がると真ん中の長い廊下を挟んで両側に一間ずつの部屋が並んでいる。廊下のちょうど真ん中に小さな台所と和式トイレがあった。案内された居室は、静かな部屋をという希望通りの角の部屋だったが、四畳半に小



さな押入れが付き、やはり時代物の電気スタンドが置かれた机があるだけの質素なつくりだった。部屋のストーブは炎が見えて石油ストーブ独特の臭いがする旧式で、点火すると部屋中が結露する。化粧クリムの瓶まで濡れてしまうのにはびつくりした。その上、ストーブ用の石油はポリ容器に入れて、部屋の外に保管するので、狭い廊下の両側に石油が並んでいる。天井からぶら下がっている蛍光灯は、子供時代に実家にあったような紐をゆつくりと長く引いて点滅させるものだ。夜寝るときにと差し出されたのは湯たんぽで、洗面所の蛇口は水しか出ず、お湯で顔を洗いたいならヤカンで沸かして使うようにという。まるで昭和文化博物館の中の「昭和の暮らし再現」展示室で寝起きをするようで、二一世紀の日本にもこんな場所が残っていたのだと感心するやら、あされるやらだった。確かに、二酸化炭素の排出量が極端に少ないエコな生活様式であるが、時計の針を四〇年ほど逆周りにしたような環境に突然タイムスリップしたようだった。

この下宿の住人のほとんどが外国人留学生だが、海外からの旅行者も受け入れているようだった。まだリーマン・ショックの影響が残る円が非常に強い時期だったので、安い宿舎を探す必要性に迫られた留学生達が多かったのだろう。ただ、隣の住民は若い日本人女性で、朝の出勤の際にはばっちりメイクをしハイヒールを履いて出かけ、近くのスポーツジムの会員でもあるという。エアロビックスを終えて帰宅するのが、四畳半のあ



ばら家下宿というギャップをどう感じているのだろうか。家賃を節約した分、その他の消費にお金が廻ると合理的考えなのだろうか。一方、日本のハイテクに憧れてやってきた海外からの若者達はこの宿舎に足を踏み入れたときどう感じただろうか。海外で日本について報道される映像とのギャップにショックを受けたのだろうか、それともエキゾチックな異文化体験とかえって喜んだのだろうか。あるいは、貧乏留学生の耐乏生活と割り切って耐え忍んだのだろうか。そして母国へ帰ったときに京都での暮らしを現代の日本の中でどう位置づけるのだろうか。などなど、文化人類学研究者として好奇心や興味もあったが、地震で家の下敷きになるか、石油ストーブから発生した火事で焼け死ぬのではないかという心配で、結局早々に退去してしまった。飽食や大量消費の時代といわれると同時に、長引く不況と前年の金融危機の影響で「貧困」という忘れ去られていた言葉が口に出されるようになっていた日本だったが、ハイテクならぬローテクの四畳半暮らしをする外国人達はそれをあえて選んだのだろうか、それともそれ以外の選択肢がなかったのだろうか。そして、蛇口をひねるとお湯が出てきたり、石油の臭いがしない暖房など、当たり前前に享受しているものが生活からなくなったときに、それに再適応するのがいかに難しいかを実感した。

一方、人文研では三ヶ月間あまりの短期滞在在外国人研究員ではあるが、雇用形態は日本人の正規雇用と同じになったとかで、



国民健康保険のみならず失業保険や国民年金にも加入する必要があった。私が将来日本で失業保険や年金を受給する可能性は絶対に無いとわかっていたが、加入は義務ということで、書類に記入をした。その際に、記入事項の訂正には定規を使って誤字に線を引き、かつその部分には印鑑を押すという正式のやり方を教えられた。きっと事務方の人は、私を見て「外国生活が長いと、いくらまだ日本語がしゃべれても常識の点ではまったく外国人」と思ったのではないだろうか。

オーストラリアでは日本人としてみなされ、日本では「外国人研究員」という立場で仕事をしている私は、イソップ寓話に出てくるこうもりのような存在かもしれない。ただ、日豪の両方が見渡せるフェンスの上に腰掛けているからこそ、体験したり感じたりできることもあるだろう。何とかそこから転げ落ちないようにしながら、今後も研究活動が続けていきたいと願っている。



講演



夏期公開講座

貧民窟の食生活

——松原岩五郎『最暗黒の東京』——

藤原辰史

一八九二年一月一日、『國民新聞』で「芝浦の朝烟（最暗黒の東京）」という連載がスタートした。これは、途中、何度か中断を挟みつつ、「最暗黒の東京」、「探検實記 東京の最下層」、「探検實記 夜の東京」、「東京 最暗黒の生活」とタイトルを変えながら、八月二三日までは十ヶ月にわたって掲載された。い

わば、スラム潜入記である。この連載は好評を博し、一九八三年一月九日、『最暗黒の東京』というタイトルで民友社から出版された。

この著者は、松原岩五郎、筆名は乾坤一布衣。出版当時二七歳の彼が『最暗黒の東京』のなかで描く東京の下層社会は、いまなお読者をとらえて離さない。とりわけ、東京三大スラムのひとつ、四谷鮫ヶ橋の残飯屋の描写はすさまじい。

「家は傾斜して殆ど転覆せんとするばかりなるを突かい棒もて、これを支え、軒は古く朽て屋根一面に藓苔を生じ、庇檐は腐れて疎らに抜けたるところより出入する人々の襟に土塊の落ちんか殆どむほどの家」。この残飯屋に松原は弟子入りする。ここで彼は、市ヶ谷の陸軍士官学校から残飯を仕入れて貧民たちに売りさばきながら、貧民たちの話を聞き、次第に頼られるようになる。

「我れ先きにと筈、岡持を差し出し、二銭下さい、三銭おくれ、これに一貫目、茲へも五百目と肩越に面桶を出し腋下より銭を投ぐる様は何に譬えん、大根河岸、魚河岸の朝市に似て、その混雑なお一層奇態の光景を呈せり。そのお菜の如き、煮シメ、沢庵等は皆手攫みにて売り」。

松原の描写は、極めて具体的だ。たとえば、「虎の

皮」という商品の名は「巨大なる釜にて炊く飯は是非とも多少焦塩梅に焚かざれば上出来とならざるより、釜の底に祀^{まつ}られし飯が一面に附着して宛然虎豹^{さみからこひょう}の皮か何ぞのごとく斑^{まだら}に焦たるが故に」付けられた。士官学校からの仕入れが少ないときは「飢饉」、大量に仕入れたときは「豊作」と呼ばれたという。貧民窟で残飯屋が栄えた理由は、近くに繁華街や士官学校があることのほかに、その経済性にある。調理済みの残飯を食べることで燃料代を浮かすことができるからである。

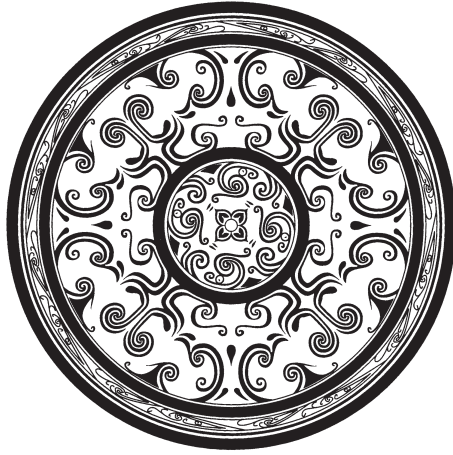
ところで、松原の貧民への視線は、啓蒙家の視線ではなく、学ぶ人間の視線である。「世に何々倶楽部、何々政党倶楽部、または何某集会所、何某会合所たる場所にその社会の人々の名譽談、失敗話は勿論、そのほか奇話珍説一切の秘密即ち新聞雜報的瑣事^{さしじ}が漏洩^{もつせう}して来ッて」いるが、「予が居る所の残飯屋はあたかも彼の人たちの社交倶楽部とも言ふべきものにして下男^{しもやう}の境界にありし予は即ちここの書記役なり」。痛烈な政治批判である。政治家の公共圏は、貧民たちを排したうえで成り立っているのである。学者にも厳しい現実への眼を曇らせる学問に比べ、貧民たちの生きる知恵のなんとたくましく、なんとすがすがしいことか。松原は最大の敬意を払って、最暗黒の世界を「貧大

学」と呼ぶのである。

そして、こうした目線の射程は、帝国日本の版図拡大と軌を一にして広がる。一八九五年、松原は日清戦争の従軍記者として朝鮮半島へわたり『征塵餘録』を執筆する。「亜弗利加内地の探検にして其昔時冒険者スタンレーがザンジバルを土人を雇ふて隊を組み、ウンヨルカムの山頂に登つて遙かにヴェクトリアナイアンザ地方の大平原を想望したるの意気を見るべかりし、山を下る二三丁にして、一部落あり人家一五六戸、狹隘蕪^う悪なる道を挟んで左右に散点す、人糞途に満ち、犬あつて是を食ひ豕ありて其臭気を嗅ぐ、不潔陋穢^{しやうたい}殆ど歩むべからず路傍に一軒のし酒幕あり即ち飲食店にして檐下^{のきもと}に牛の髒體を吊すあり、血液点々として滴り、無数の蒼蠅是に腐集す」。

ここで注意すべきなのは、「最暗黒」のイメージが地球規模であることだ。イギリスの探険家H・M・スタンレーの『最暗黒のアフリカ』（一八九〇）はもちろん、それに刺激を受けて執筆されたW・ブースの『最暗黒のインゲランド』（一八九〇）からの影響もあるかもしれないことは、すでに前田愛によつて指摘されている。そしてさらに「最暗黒」へのまなざしは、帝国の膨張の波に乗って、朝鮮半島の貧民の食生活に及ぶのである。

松原岩五郎の異境への「探検」は、食を通して浮かび上がる貧富の構造を、世界規模で映し出す。これが、いまなお松原の描写が凄みを失わない理由のひとつであろう。



巡礼と都市

—— ナーセレ・ホスロー『旅行記』を読む ——

稲葉 穰

いまから一千年近く前、西暦の一〇四五年、当時西アジアを支配していた大セルジューク朝に仕えていた官吏ナーセレ・ホスローは酒浸りの自堕落な生活を送っていたが、ある夜、夢でお告げを聞いたことをきっかけに宗教的情熱に目覚め、職を辞して、メルヴ（現トルクメニスタン共和国マリ近郊）からメッカをめざして巡礼の旅に出発した。その後、一〇五二年にバルフに帰着した後、彼は自らの旅の記録を書き残した。その名も『旅行記』として知られるこの作品は、ペルシア語古典散文の傑作の一つに数えられ、平明かつ美しい文章のゆえに、今でも多くのイラン人に愛されている作品である。また現在までフランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、アラビア語、ウルドゥー語、タジク語、デンマーク語などに翻訳されており、日本語訳も森本一夫氏監修のもと、『史朋』（北海道大学東洋史談話会）誌上に四回に分けて掲載された。

ナーセレ・ホスローの旅はもちろんイスラム教徒としての努めであるメッカ巡礼を目指したものであったが、彼が最も長い時間を過ごしたのは、当時ファティマ朝の首都として拡大を続けていたカイロであった。ファティマ朝は、九世紀以降イスラム世界において目覚ましく勢力を拡大したイスマール派の政権であり、その都のカイロは、紅海を通じてインド洋と地中海とを結ぶ交易ルートの重要な拠点として、それまでのバグダードおよびイラク地方に代わって、政治的にも経済的にもイスラム世界の一大中心となっていた。ファティマ朝はカイロの巨大な経済力を背景に、この交易ルートとネットワークに沿って各地に布教の手を伸ばしていたのであった。ナーセレ・ホスローも、自らは「夢のお告げ」に導かれてと記しているにもかかわらず、実は早い時期にイスマール派に改宗していた形跡があり、彼の旅自体も、メッカだけでなく、そもそもカイロを目指して企図されたと考えられる。そのことは、彼が東方からメッカに直行するルートではなく、わざわざイラン高原の北辺を経由してシリア北部に出て、そこから海岸線を南下してイエルサレムに到達し、メッカ巡礼を済ませ、さらにカイロに至る、というルートをとったことから看取できる。これらの地域はファティマ朝の直接支配下にあったか、あ

るいはイスマール派の影響力の極めて強い場所だったのである。

それにしても、彼が記録する一一世紀後半の地中海東岸の様子は、同世紀末に始まる十字軍によって同地域が戦乱に巻き込まれる直前の有様を生き生きと伝えていて興味深い。たとえば十字軍前夜のイエルサレムについて『旅行記』は、イスラム教徒とキリスト教徒が、どのような空間配分のもとで住み分けていたのか、当時のムスリム知識人がキリスト教徒をどのように見なしていたのか、さらにはローマ皇帝はこのまちにどういうやり方で関係を持つようとしていたのか、といった点を教えてくれる。また、当時イスラム世界きつての、そしておそらくは世界でも有数の大都市になりつつあったカイロにおいて、人々がどんな住居に暮らし、借家の家賃はいくらだったのか、バザールはどのように構成され、物価はどんな具合だったのか、人々はどんな仕事をしてどれほどの賃金を得ていたのか、といった事柄に関する『旅行記』の記録は、歴史研究にとっても極めて貴重な資料を提供してくれる。

旅を終えたのち彼は、東方におけるイスマール派布教に傾注したが、おりしもセルジューク朝は「非正統」イスマール派の弾圧を積極的に推進しつつあり、ナーセレ・ホスローは山深いバダフシャ

ン（現在のアフガニスタン北東部）に逃れて、一〇七二（一説には一〇八八）年に死去するまで、同地において著述と布教に勤しんだという。『旅行記』だけでなく、多くの優れた韻文作品や宗教関連の書物をも書き著したことにより、彼はペルシア文学史に燦然と輝く偉大な文人としての名声を得た。バダフシヤンのイスマール派はその後、活動の場を更に東に求め、結果として同派はヒンドークシュやパミールといった険しい山岳地帯を縫うようにして東に広がっていった。現在でもパキスタン北部、インドス川上流のギルギットやチラス、チトラルといった地域に多くのイスマール派が住み暮らしているが、このコミュニティの淵源はナーセレ・ホスローの時代に求められるのである。

都市を徘徊する

——ポア『群集の人』の世界——

富 永 茂 樹

最初に文学と都市の関係についてひとこと。ある都市についての「情報」を与えてくれる文学、都市に向ける社会学的な「視点」（階級、公共空間など）を示してくれる文学、都市そのものを「発見」させてくれる文学、この三つのうちで「パリ——一九世紀の首都」（一九三五年）のヴァルター・ベンヤミンが関心をもったのは最後のものであったにちがいない。彼がボードレールとの関係でふれるエドガー・アラン・ポアの小説「群集の人」もまた、そうしたものとして私たちの前に現われる。

ロンドンで病気の予後を過ごす主人公「語り手は、とあるカフェに腰をおろして、夕刻の道ゆく人の群れを眺めている。「私はそれを集団として見、集団的關係においてだけ考えていた。」彼の目の前をすぎてゆく群れにはいくつかの種類がある。まず家路を急ぐ人びと。彼らには帰るべきところがある。つまりそれぞ

れの家族に所属している人間である。服装などから職業や地位がわかる人びとがいる。彼らもまたなんらかの集団に所属していることが明らかである。「だが、私はこれらの人びとにはあまり興味がなかった。」

やがて「高等掏摸」や賭博師、「あらゆる種類、あらゆる年齢の街の女」。社会の中心ではなく周縁部に存在する人間たちである。さらには時間の経過とともに、荷運び人足、煙突掃除人、風琴流し、猿廻し……

すべて書きうつしては切りのないほどに多様な社会からはいっそう距離のある人びとが登場する。

「異常な活気にあふれ、見ているだけでも耳は鳴り、眼は刺すような痛みを覚える」ほどの風景を語り手は観察している。観察とはまなざしの「徘徊」である。

ここまでのところ「群集の人」は一九世紀のロンドンの様子を教えてくれる、あるいは都市社会学（とはいえ、ありきたりの社会学よりはるかに精緻な）を試みる文学作品にとどまるかもしれない。ところが事態は突然に変わる。背丈の低い、やせこけ、薄汚れた服装をした老人の顔が眼に映るのである。表情からは複雑な観念が読み取れる老人に興味をもち、秘密を探りたいと考えた語り手は尾行を開始することになる。

それとは知らない老人は夜の街を歩きつづける。どこか行く先がありそうではない。雨が降りはじめ、周

囲の群れの様子は一変するが（みんな傘を取り出し、急ぎ足になる）、老人の歩みは変わることがない。たまたま商店に入るけれどもなにかを買うことはない。彼は都市を徘徊しつづける。観察から尾行へと、まなざしの徘徊から身体のそれへと変わった語り手の徘徊がそれを追跡する。二重の徘徊はしかし、夜が更けても、また翌日になっても終わらない。特別ななにごとに outcomes 出くわすわけではない。

いよいよ二日目の夜になったとき、すっかり疲れ果てた語り手はついに老人の前に立ちはだかるが、そんなことにも気づくことのない彼は群れのなかを当てもなく往来する。語り手はここで尾行を断念する。そしてこのように呟く。「あの老人は一人でいるに堪えられない。いわゆる群集の人なのだ」と。一九世紀の大都市における群集ではなく、「群集の人」を発見するところに、この小説の意義がある。

ボーがこの作品を発表したのは一八四〇年。その五年後、同じロンドンで「押しあいながら足早に通り返してゆく」群集にモノド化した人類の存在を認め、「なにか不快なもの、なんとなく人間性にさからうもの」を感じ取ったのがエンゲルスであった（『イギリスにおける労働者階級の状態』）。一八三五年にマンチエスターを訪れたトクヴィルもまた、この工業都市で

「足どりが粗暴で、放心したようなまなざし、陰鬱で粗野な姿をした」ひとの群れに出会ったことを手帳に記していた。

エンゲルス、トクヴィルそしてポー、それぞれのあいだで群集の捉えかたはことなる。とりわけ前二者の群集が焦燥感に充ちているのについて、「群集の人」で描かれるのは群れのあいだをかいくぐる徘徊である。まずは歩行の速度がちがう。それでも独りであることに堪えられないかぎり、ポーの老人もまたエンゲルスのいうモナド化した存在であり、群集のあいだを徘徊する彼の行動には別種の焦燥を読み取ることもできないわけではない。

ポーには「群集の人」の前の年に「沈黙」という作品がある。そこでは河は海に向けて流れようとせず、不安な痙攣をつづける病的なサフラン色の河床でざわめく巨大な青白い睡蓮を眺めて飽きない人物が登場する。これを見た悪魔が魔法をかけてざわめきを加速させてもびくともしない男は、逆に完全な沈黙をもちますと、急に驚いてその場を逃げ出してしまふ。「群集の人」と「沈黙」とは相同な関係にある。こちらに登場するのもまた独りではいられない人間であり、彼の見ていた揺れてざわめく睡蓮は群れとその焦燥感を表わしていることがわかってくる。

ところで時代は下がり世紀末に、在外研究を命じられロンドンに到着した翌朝、夏目金之助はエンゲルスが見たのと同質のひとの群れに巻き込まれ「なんとなくこの都にいづらい感じ」をおぼえる（『永日小品』）。ポーは戦争が終り南アメリカから帰還した兵士を迎えてヴィクトリア駅周辺にできた群集であった。この経験は帰国後も保持され深められて、漱石の文学の作品で活かされることになる。こうして都市の群集とその表象は一九世紀をとおして、そして極東の国にいたるまで受け継がれる。その出発点にポーの「群集の人」は位置している。

「群集の人」は『ポオ小説全集・Ⅱ』に収録された
永川令二訳に依拠した。）

創立八〇周年記念

創立八〇周年記念式典における式辞

所長・水野直樹

八〇周年の記念式典を催すにあたり、ご多忙の中、また遠方よりご出席いただきましたみなさんに心よりお礼を申し上げます。特に、松本総長、文部科学省の磯田局長、東京大学東洋文化研究所の羽田所長、本学再生医科学研究所の坂口所長には、多忙を極めておられることを承知のうえで、式典で祝辞をいただくようお願いを申しあげ、快く引き受けていただきました。深く感謝のことばを申し上げます。

また、先ほどの記念講演会、シンポジウムでお話しいただきました諸先輩には、重ねてお礼を申し上げます。

人文科学研究所は、本年創立八〇周年を迎えることとなりました。国立大学附置研究所として、また人文

系の研究所として、このように長い歴史を築いてくることができたのは、ひとえに関係者の皆さま方、また多くの先輩の方々の、ご支援のたまものと考えております。感謝申し上げます。

創立八〇周年と申し上げておりますが、それは、人文科学研究所の起源の一つである東方文化学院京都研究所が設立された一九二九年から数えてのことであり、また、東方文化学院京都研究所は、外務省の外郭団体として設立されたものであり、京都帝国大学の附置研究所ではありませんでした。

その後、一九三九年に京都帝国大学の附置研究所として人文科学研究所（旧人文科学研究所）が設置されました。それから数えると、今年には七〇周年ということになります。

さらに、戦後の一九四九年に、東方文化学院京都研究所の後身である東方文化研究所（京都）、民間団体である西洋文化研究所と、旧人文科学研究所が統合して、現在の京都大学人文科学研究所が発せしました。それから数えると、今年には六〇周年になります。

このように、人文科学研究所は八〇年、七〇年、あるいは六〇年の歴史を歩んでまいりました。

しかし、これらの研究所は、時どきの時代的背景、制約の中に置かれていたことも否定できません。東方

文化学院は、義和団賠償金にもとづく対支文化事業の一環として東京と京都に設けられたものであります。また、西洋文化研究所の前身である独逸文化研究所は、一九三〇年代のナチス政権成立直後に日本とドイツの文化交流・学術交流を目的にして設けられたもので、外務省の監督下にありました。

京都帝国大学の附置研究所である旧人文科学研究所は、設置に関する説明資料に書かれているように、「東亜新秩序」確立のため学術的研究を行なうことを目的にしました。

今回、八〇周年を迎えるあたり、研究所の歩みを紹介するためのパンフレットを作成し、本日、皆さま方にお配りしておりますが、独逸文化研究所、旧人文科学研究所に関わる資料も収録いたしました。私たちは、自らが属する研究機関の過去の歩みを振り返る中で、反省と自戒の念を持つことも必要であると考えています。

戦前のこれらの研究所は、戦前日本の学術研究がはらむ問題を端的にあらわす事例であったといつて過言ではありません。もちろん、その中ですぐれた研究がなされてきたことも申し述べておかねばなりません。

戦後、新しい人文科学研究所の出版にあたって、私たちの先輩は「世界文化の総合的研究」を目的に掲げ

ました。

そのために採用されたのが、共同研究という研究方法でした。もちろん、戦前においても同様の方法で研究がなされてきました。雲岡石窟の研究などは、東洋学に関わる諸分野の研究者による共同研究といつて差し支えありません。

しかし、戦後の人文科学研究所においては、様々な分野の、また対象とする地域や時代が異なる研究者による共同研究という方法が自覚的に採用されました。日本の学術研究における共同研究の草分けといつても過言ではありません。そのような中から、多くのすぐれた研究が生み出され、研究所の名前が広く知られることとなりました。多くの私たちの先輩の創意と努力によるものであります。

人文科学研究所の第一の特色が共同研究にあるとするなら、第二の特色は基礎研究にあるといつてよいと思います。古典的文献の翻刻、注釈をはじめ、各種の目録作成がこれにあたります。近年は、データベースの作成を継続しており、世界中の研究者に広く利用していただいております。

そしてまた、多彩な研究者による個人研究も特色のひとつと言えると思います。共同研究の中から生まれ、あるいはそこにヒントを得た着想を生かして、

様々な研究成果を生み出しています。もちろんこれは、研究所に所属する者だけではなく、共同研究に参加する学内外の研究者についても同様のことが言えると考えられます。共同研究を通じて多様な分野の研究者が交流し議論することによって、新たな研究が実りあるものとして生み出されてきたのではないかと思います。さて、人文科学研究所は、来年度から新たな歩みを踏み出そうとしています。共同利用・共同研究拠点として、研究者に広く開かれた研究機関となることをめざすこととなりました。これまでの大学附置研究所というあり方のうえに、共同利用・共同研究という機能を付け加えた研究機関であります。

これまでも、多くの研究者に利用していただき、共同研究にも加わっていただいていたまいりましたので、その点で大きく変わるわけではありません。しかし、研究者コミュニティの意見に耳を傾け、また公募によって新たな研究テーマを設定するなど、これまでとは異なる方法を新たに始める予定であります。それを通じて、幅広い研究者が参加する共同研究機関としての機能を果たしていきたいと考えています。

何よりも、人文科学の分野において、様々な領域・分野、異なる対象地域・時代を研究する研究者が同じところで、一つの研究会で交流・議論するという人文

科学研究所の特性を今後も生かしていきたいと考えています。

最後に、本日の記念行事に参加くださった方々に重ねてお礼を申し上げますとともに、今後とも人文科学研究所の活動、事業を見守り、またご支援をたわまりますよう、お願いを申しあげて、私の挨拶としたいと思います。ありがとうございました。

創立八〇周年記念シンポジウム

「共同研究の可能性——人文研八〇年の回顧と展望——」

二〇〇九年十一月十五日（木）

芝蘭会館・稲森ホール

講師

加藤 秀俊（社会学者）

鶴見 俊輔（哲学者）

礪波 護（大谷大学博物館長）

松尾 尊兌（京都大学名誉教授）

司会

金 文京

岡田 暁雄

資料の行方

――探検してわかったこと、わからなかったこと――

菊 地 暁

二〇一〇年三月、人文研探検班（班長・岩城卓二・菊地暁）は予定どおり終了した。研究班の活動を通じて解明できたことは少なくなく、その反面、浮かび上がった課題はさらに多岐にわたるのだが、詳細は作成中の別稿にゆずり、ここでは資料論的な側面に絞って概要を報告したい。というのも、本館移転にともなう非現用文書廃棄の懸念をきっかけとして発足した探検班は、人文研八〇年の営為を近現代日本史に位置づけなおすというはるかな課題を見据えつつも、実際には文書目録作成をはじめとした基礎データの整理作業に活動の大半が費やされたからだ。

さしあたり非現用文書について述べると、圧倒的な「東高西低」といわざるをえない残存状況が明かとなった。周知の通り、現・人文研は東方文化学院京都研究所、独逸文化研究所、京都帝国大学人文科学研究所という設立の経緯も主体も異なる三研究所が統合して

生まれたものだが、東一条の旧本館地下一階に残された文書の残存量は単純な三等分とはならず、簿冊数にしておおよそ八対一對一という割合となった。若干の旧人文関係文書が京大文書館に残されていることが判明したものの、それを加えたところでこのアンバランスが大きく変わるわけではない。

この残存状況をどのように考えるべきだろうか。旧人文・旧分館の度重なる移転や、旧独逸文化研究所の占領期における接収など、文書の紛失をもたらしただろう契機はいくつか考えられる。また、戦時中のページを欠いて前後を残した簿冊が残されていることからすると、敗戦後における文書の意図的廃棄の可能性も予測される。これらに比して、開所当時の所屋が基本的に維持されてきた東方部に多くの文書の伝来をみたことは、保存環境の有利性からすれば、ある意味当然なのかもしれない。

また、非現用文書に限らず、研究会資料、写真、カード、フィールドノート、考古資料、民族資料といったさまざまな形態の資料群が、北白川の所屋、とりわけ共同研究室のあちこちに残されている。歴代所員により執筆された回想の類も、東方部関係のものが西洋部・日本部関係に比して多いようだ。このようにみると、研究所の伝統をことさらに尊重にする「冷た

い社会」東方部と、それをかたくなに捨て去ろうとする「熱い社会」人文部、という対比ができないこともない（旧西洋部の社会人類学部門がやや異質であるという興味深い問題の考察は他日にゆずる）。いずれにせよ、資料・記録の残存という一点に関する限り、「東高西低」は否定しがたい客観的事実なのだ。

とはいえ、「東高西低」の一語で資料の残存状況を説明しつくせるわけではない。そもそもこの非現用文書群は、基本的には『京都大学人文科学研究所五十年』（一九七九）の編纂のために集められたものらしい。その際、来るべき『百年史』編纂に備え、関連資料を複写し事項別に整理していくためのファイル・ケースが用意されたことが、編纂委員を務めた太田武男により記されている（『京大史記』（一九八八）所収記事）。ところが、人文研探検班を始めるに先立ち、旧本館地下で我々が発見したのは、資料の追加作業を永らく忘れ去られ、その存在意義も失念されたファイル・ケースだった。『五十年史』編纂から三十年という時の経過は、その編纂作業の苦労と後世への配慮を忘れ去るのに充分すぎる時間だったわけである。

このことは一つのレッスンだろう。一般に過去の情報は、記号に書き記されるか、モノの形を保つか、カラダに刻み込まれるか、そのいずれかでしか伝わらな

い。そしてこの三者は思いのほか補完的だ。記録や遺品がそこにあれば、それだけで勝手に「歴史」が伝わるわけではない。記録や遺品はそれ積極的に読み解く主体の能動性があって初めて、記録、遺品たり得る、すなわち、「史」の「料」となる。それがなければ、いかに優れた記録や遺品も、反故、ガラクタの類に過ぎない。逆にいえば、「史料」が「史料」として継承されていくことには、それ相応の「歴史意識」、平たくいって、「史料」への興味、関心、レスペクトが必要だということだ。

そのために、いかなる仕掛けが可能なのか。子細を論じる紙数はもはや残されていないが、いずれにせよ、構想力と実践性が問われるところだ。

最後に。東一条旧本館二階談話室東北角を、まるで鬼門を護るかのように鎮座していた木彫りの鶏は、青森県出身の彫刻家・森英之進（一八七二—一九五八）の手になる「再興第二一回日本美術院展覧会」（一九三四）の出品作「軍雞」であることが、班員・高階絵里加氏によりつきとめられた。残された課題はその入手経緯の解明。引き続き、不審な物件人物にまつわる情報提供を乞う次第である。

彙報

おくりもの

- 。富谷至教授は北極星勲章コマンデール章を受賞（二〇〇九年七月六日付）
- 。岡田暁生准教授は第十九回吉田秀和賞を受賞（二〇〇九年十月十日付）
- 。山室信一教授は紫綬褒章を受章（二〇〇九年十一月三日付）
- 。永田知之助教は第十九回蘆北賞を受賞（二〇〇九年十一月五日付）

人のうき

- 。田辺明生准教授（人文学研究部）は、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授就任（四月一日付）。
- 。水野直樹教授（人文学研究部）を当研究所長に併任（四月一日～二〇一一年三月三十一日）。
- 。岩井茂樹教授（東方学研究部）を附属東アジア人文情報学研究センター長に併任する（四月一日～二〇一一年三月三十一日）。
- 。森時彦教授（東方学研究部）を附属現

- 代中国研究センター長に併任（四月十六日～二〇一一年三月三十一日）。
- 。稲葉穰准教授（東方学研究部）は当研究所（東方学研究部）教授に昇任（四月一日付）。
- 。井波陵一教授（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。武田時昌教授（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。安岡孝一准教授（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。永田知之助教（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。向井佑介助教（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究

- 究センターに配置換（四月一日付）。
- 。守岡知彦助教（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。山崎岳助教（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。梶浦晋助手（附属漢字情報研究センター）は、附属東アジア人文情報学研究センターに配置換（四月一日付）。
- 。安藤房枝を助教（東方学研究部）に採用（四月一日付）。
- 。白井哲哉を特定研究員（科学研究）に採用（四月一日付）。
- 。VITA, Silvio イタリア国立東方学研究所所長は、客員教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一〇年三月三十一日）。
- 。JACQUE, Benoit Marcel Maurice フランス国立極東学院京都支部長は、客員准教授（文化研究創成研究部門、四月一日～二〇一〇年三月三十一日）。
- 。袁広泉 大学共同利用機関法人人間文化研究機構地域研究推進センター研究員は、客員准教授（附属現代中国研究

センター、四月一日～二〇一〇年三月三十一日。

。藤原辰史助教（人文学研究部）は、辞任の上（五月三十一日付）、東京大学大学院農学生命科学研究科講師就任。

。MAHARJA, Keshav Lal 広島大学大学院国際協力研究科教授は、特任教授（十月一日～二〇一〇年三月三十一日）。

。梶原三恵子を助教（人文学研究部）に採用（十月一日付）。

。日下渉を助教（人文学研究部）に採用（十一月十六日付）。

。田中淡教授（東方学研究部）は定年により退職（二〇一〇年三月三十一日付）。

海外での研究活動

。高田時雄教授（東方学研究部）は、三月

月二五日大阪発、Institute of Oriental Manuscript, Russian Academy of Sciences に於てロシア中央アジア探検隊に関する共同研究の打ち合わせを行い、四月一日帰国。

。富永茂樹教授（人文学研究部）は、四月八日大阪発、国立極東学院、高等研究院に於いて研究セミナーに出席、国

立図書館に於いて資料収集を行い、四月十八日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属東アジア人文情報学研究センター）は、四月十二日大阪発、漢達文庫に於いて資料収集及び研究打ち合わせ、中華電子仏典協会に於いて資料収集及び研究打ち合わせを行い、四月十八日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、四月二六日大阪発、成功大学に於いて講演、資料収集を行い、四月三十日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属東アジア人文情報学研究センター）は、五月三日大阪発、Mahachulalongkrajavidyalaya University に於いて仏典資料の国際ネットワークに関するワークショップに出席し、五月八日帰国。

。船山徹准教授（東方学研究部）は、一月二十日大阪発、ハーヴァード大学に於いて客員教授として授業担当及び資料収集を行い、六月一日帰国。

。石川禎浩教授（附属現代中国研究センター）は、六月一日大阪発、成均館

大学に於いて学術講演並びに研究打ち合わせを行い、六月四日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、五月三十一日大阪発、

Eötvös Loránd Univ. に於て学術会議に出席、論文を宣讀、Oriental Institute of the Czech Academy of Sciences に於いて中央アジア出土文献に関する資料収集を行い、六月七日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属東アジア人文情報学研究センター）は、六月五日大阪発、His-Lai-Temple に於て Council on the translation of Buddhist Sutras に出席し、六月十日帰国。

。宮紀子助教（東方学研究部）は、五月十五日大阪発、北京大学歴史系、北京大学図書館、中国国家図書館等に於いて学術交流、講義、資料調査を行い、六月十三日帰国。

。富谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月十五日発、廈門大学において国際シン

ボジウム「東アジアにおける礼と正義」の打ち合わせ及び「東アジアの死刑」中国語版出版に関する打ち合わせを行い、六月十七日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究所）は、六月十七日大阪発、復旦大学に於いて国際会議に出席、浙江省平湖市に於いて乍浦鎮における現地調査を行い、六月二二日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月十六日大阪発、Institute of Oriental Studie, Kazakhstan に於いて学術会議に出席、論文を宣讀、Institue of Archaeolog, Kyrgistan に於いて中央アジア出土文献に関する資料収集を行い、六月二四日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究所）は、受託研究費（一部先方負担）により、六月十四日成田発、ハーバード大学に於いて「先端幹細胞研究における倫理と政策」会議に参加し情報交換および調査を行う、TANE + ILIC に於いて幹細胞研究を中心とした米国における科学情報の発信に関する聞き取り調査

を行う、Welcome Trust Conference Centre に於いて「国際がんゲノムコンソーシアム（ICGC）第二回ワークショップ」に参加し、情報交換及び提言を行い、Human Genetics Commission に於いて意見交換と情報収集を行い、六月二六日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、六月二一日大阪発、成均館大学に於いて連続講義及び資料収集を行い、六月二六日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、六月二三日大阪発、中央民族大学、西南民族大学、中国藏学研究中心に於いてギャロン語方言に関する資料収集と調査打合せを行い、六月二八日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究所）は、受託研究費（一部先方負担）により、七月六日成田発、Hotel Diagonal Zero に於いて国際ワークショップ「IPS cells:mapping the Policy issues」に出席し、パネリストとして発表、Barcelona International Convention Center に於いて7th ISSCR に出

席し、研究発表を行い、七月十三日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、七月二七日大阪発、四川大学に於いて中国俗文学国際學術検討会参加及び論文発表を行い、七月三一日帰国。

。石川楨浩准教授（附属現代中国研究センター）は、七月二十日大阪発、厦門大学、湖南省図書館、湖南省檔案館、国家図書館に於いて中国近現代史資料調査を行い、八月一日帰国。

。古松崇志助教（東方学研究所）は、七月二四日大阪発、旅順博物館に於いて収蔵品の調査、巴林右旗博物館、慶州古城遺跡、懷州城、赤峰市博物館等に於いて中国内蒙古自治区赤峰地区の契丹時代の考古遺跡と現状のフィールド調査を行い、八月一日帰国。

。向井佑介助教（附属東アジア人文学情報学研究センター）は、七月二四日大阪発、旅順博物館に於いて収蔵品の調査、巴林右旗博物館、慶州古城遺跡、懷州城、赤峰市博物館等に於いて中国内蒙古自治区赤峰地区の契丹時代の考古遺

跡と現状のフィールド調査を行い、八月一日帰国。

。高田時雄教授（東方正学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月三日大阪発、国立成功大学に於いてロシア所蔵敦煌文献に関する研究打合せを行い、八月六日帰国。

。高木博志准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、八月六日大阪発、北京師範大学珠海分校国際学術交流中心に於いて民間文化フォーラムに出席及び研究報告を行い、開平市内に於いて歴史遺産の調査を行い、八月九日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月二日大阪発、ユトレヒト大学に於いて国際経済史学会に出席し研究発表を行い、イギリス公文書館に於いて旧RPO資料に関する現地調査及び資料調査を行い、八月十五日帰国。

。古勝隆一准教授（東方正学研究部）は、二〇〇八年八月三十日大阪発、ハーバード大学燕京研究所に於いて中国思想史研究を行い、二〇〇九年八月十五日

帰国。

。金文京教授（東方正学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、八月十二日大阪発、友石大学において日韓人文社会学会参加、論文発表、資料収集及び研究打合せ、首都師範大学に於いて中国古典小説戯曲文献及数字化国際検討会参加及び論文発表、成均館大学に於いて中国小説に関する資料収集を行い、八月二日

帰国。

。菊地暁助教（人文学研究部）は、八月十九日大阪発、東国大学に於いて「文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較研究」研究会に出席し、外岩民族マウル及び水原市華城に於いて「文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較研究」現地調査を行い、八月二三日帰国。

。池田巧准教授（東方正学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、八月四日大阪発、中央民族大学、西南民族大学及び中国藏学研究中心に於いてギャロン語方言にかんする資料収集と

調査打合せを行い、八月二四日帰国。

。山崎岳助教（附属東アジア人文情報学研究センター）は、八月二三日大阪発、四川省档案馆、上海図書館に於いて東アジア史上における中国訴訟社会の研究のための資料収集を行い、八月三十日帰国。

。森時彦教授（東方正学研究部）は、共同研究費により、八月二一日大阪発、社会科学院近代史研究所に於いて学術講演、研究打ち合わせ及び資料収集、貴陽大学において国際シンポジウム出席及び基調講演、上海市档案馆に於いて資料収集を行い、九月三日帰国。

。石川禎浩准教授（東方正学研究部）は、八月二五日大阪発、カリーエ博物館、イスタンブール大学、アクロポリス博物館、アテネ国立考古博物館に於いて港湾都市文化の調査、研究打合せを行い、九月五日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究部）は、受託研究費により、八月三一日大阪発、ソウル郊外に於いてソウル郊外の環境問題の調査と関係団体との交流を行い、九月五日帰国。

。小池郁子助教（人文学研究部）は、受託研究費により、八月三十一日大阪発、ソウル郊外に於いてソウル郊外での環境問題の調査と関係団体との交流を行い、九月五日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月二日大阪発、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所において「敦煌学―更なる百年」国際学術会議に出席及び資料収集を行い、九月九日帰国。

。永田知之助教（附属東アジア人文情報学研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月二日大阪発、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所において「敦煌学―更なる百年」国際学術会議に出席及び資料収集を行い、九月九日帰国。

。岩井茂樹教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月七日大阪発、中国国家図書館に於いて International Conference Chinese Studies に参加し、九月十日帰国。

。小関隆准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月一日大阪発、エディンバラ市内及びロンドン市内に於いて第一次世界大戦期のイギリスに関する史料の調査・収集を行い、九月十三日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月三日大阪発、École Normale Supérieure に於いて「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み」のための資料、文献収集を行い、九月十八日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月九日大阪発、思燕寺遺址に於いて北魏寺院址出土文物の調査、中国社会科学院考古研究所に於いて調査の打合せ、河北省文物研究所に於いて北魏定州塔址出土文物の調査を行い、九月十九日帰国。

。向井佑介助教（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月九日大阪発、思燕寺遺址に於いて北魏寺院址出土文物の調査、中国社会科

学院考古研究所に於いて調査の打合せ、河北省文物研究所に於いて北魏定州塔址出土文物の調査を行い、九月十九日帰国。

。加藤和人准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月十五日大阪発、Rimrock Resort Hotel に於いて「5th International DNA Sampling Conference」に出席、研究発表を行い、九月二一日帰国。

。富谷至教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、九月十八日大阪発、ハンブルグ大学に於いてシンポジウム「二一世紀の儒教」に参加、発表、ミュンスター大学に於いて「儀礼と刑罰」に関する研究打合せ、ライデン大学に於いて「東アジアの死刑」英語版出版の打合せを行い、九月二十九日帰国。

。山室信一教授（人文学研究部）は、九月二六日大阪発、清華大学に於いて講演及び史料収集を行い、九月三十日帰国。

。古松崇志助教（東方学研究部）は、京

都大学教育研究振興財団助成金により、九月一日大阪発、北京大学、中国国家図書館に於いて文献資料調査・現地フィールド調査及び学術講演を行い、九月三十日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、九月一日大阪発、成均館大学東亜学術研究院に於いて連続講演及び東アジア比較文学に関する共同研究参加、中央研究院歴史言語研究所に於いて東亜文化意象之形塑（国際学術討論会）参加、論文発表、資料収集及び研究打合せを行い、十月一日帰国。

。森時彦教授（東方学研究所）は、十月三日大阪発、中央研究院に於いて国際シンポジウム出席及び基調講演を行い、十月七日帰国。

。宮宅潔准教授（東方学研究所）は、二〇〇八年十月十五日大阪発、ミュンスター大学に於いて中国古代刑罰制度の研究を行い、二〇〇九年十月十四日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、十月十二日大阪発、成均館大学東亜学術研究院に於いて連続講演及び東アジア比

較文学に関する共同研究に参加し、十月十六日帰国。

。稲葉穰教授（東方学研究所）は、九月二十七日大阪発、イスタンブール市内、考古学博物館及びボアジチ大学に於いて大谷探検隊関連遺物・遺跡調査、カッパドキア遺跡に於いて洞窟壁画の調査、アナトリア日本学考古研究所に於いて仏教西伝に関する研究打合せ、ガ

ジ大学に於いて仏教遺跡調査、アフラット遺跡、ヴァルビジュ遺跡等に於いて遺跡調査を行い、十月二十四日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、十月二五日大阪発、安重根ハルビン学会・東北アジア歴史財団に於いて国際学術シンポジウムでの講演と討議を行い、十月二八日帰国。

。金文京教授（東方学研究所）は、十月二五日大阪発、成均館大学東亜学術研究院に於いて連続講演及び東アジア比較文学に関する共同研究に参加し、十月三一日帰国。

。森時彦教授（東方学研究所）は、十月二五日大阪発、ハイデルベルグ大学に於いて講義、研究打ち合わせ及び資料

収集を行い、十一月七日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、十一月三日大阪発、台湾大学及び高雄第一科技大学に於いて講演及び学術交流を行い、十一月八日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究所）は、十一月五日大阪発、北京市内に於いて華僑関係資料に関する調査、北京大学に於いて北京フォーラム出席及び研究発表を行い、十一月九日帰国。

。小池郁子助教（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、十月八日大阪発、文部科学省科学研究費補助金により、オリシヤ崇拝運動拠点及び個人崇拝組織に於いて宗教実践、社会宗教運動に関する資料文献収集及び実地調査を行い、十一月九日帰国。

。森時彦教授（東方学研究所）は、十一月七日大阪発、北京大学に於いて北京フォーラムにて招待講演及び資料収集を行い、十一月十一日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究所）は、十一月九日大阪発、台湾市内に於いて華僑関係資料に関する調査、中央研究院に於いて華僑華人学会に出席及び研究

発表を行い、十一月十三日帰国。

。山崎岳助教（附属東アジア人文情報学研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、十月三十日大阪発、トレル・ド・ドンボ文書館に於いて清代檔案史料調査、シントラ、ロカ岬に於いてポルトガル海洋史跡巡見、独立宮殿に於いて国際ワークショップへの参加及び研究報告、アジア文書館に於いてイエズス会関係史料の閲覧等を行い、十一月十四日帰国。

。稲葉穰教授（東方学研究部）は、十一月十三日大阪発、ソウル国立大学に於いて研究打合せ、ソウル国立博物館に於いて国際学会“*Afghanistan on the Crossroads of Civilization*”に参加、研究発表を行い、十一月十五日帰国。

。ウィッテルン、クリスティアン准教授（附属東アジア人文情報学研究センター）は、八月十七日大阪発、オスロ大学に於いて国際シンポジウム開催と出席、講義、研究打合せ及び資料蒐集を行い、十一月十八日帰国。

。富谷至教授（東方学研究部）は、文部

科学省科学研究費補助金により、十二月五日大阪発、廈門大学法学院に於いてシンポジウム「儀礼と刑罰」を廈門大学と共同開催し、十二月九日帰国。

。矢木毅准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月五日大阪発、廈門大学法学院に於いてシンポジウム「儀礼と刑罰」に参加及び研究発表を行い、十二月九日帰国。

。古勝隆一准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月五日大阪発、廈門大学法学院に於いてシンポジウム「儀礼と刑罰」に参加及び研究発表を行い、十二月九日帰国。

。竹沢泰子教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二日成田発、マリオットホテルに於いてアメリカ人類学出席、ニューヨーク大学に於いて共同研究打合せ、ハーバード大学に於いて出版打合せを行い、十二月十五日帰国。

。船山徹准教授（東方学研究部）は、十一月十五日大阪発、ハイデルベルグ学

術アカデミーに於いて石刻經典共同研究及び資料収集を行い、十二月十八日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、共同研究費により、十二月十六日大阪発、中央研究院言語学研究所に於いて現代中国語のローマ字表記法についての資料収集を行い、十二月二十日帰国。

。池田巧准教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二十四日大阪発、中央民族大学に於いてギャロン語方言にかんする資料収集及び調査打合せを行い、十二月二十七日帰国。

。武田時昌教授（附属東アジア人文情報学研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、十二月二日大阪発、岳麓所院、湖南省文物考古研究所、武漢大学簡帛研究中心、中国科学院自然科学史研究所に於いて秦漢簡牘資料調査及び研究ワーキングに参加し、十二月二十八日帰国。

。籠谷直人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年一月三日大阪発、中央研究院

台湾史研究所に於いて南方資料館収蔵資料の調査を行い、二〇一〇年一月九日帰国。

。麥谷邦夫教授（東方学研究所）は、二〇一〇年一月五日大阪発、青松観に於いて慶祝青松観六十周年国際学術検討会に出席し、二〇一〇年一月九日帰国。
。山室信一教授（人文学研究所）は、二〇一〇年一月十日大阪発、浙江工商大学に於いて講演及び史料調査を行い、二〇一〇年一月十四日帰国。

。大浦康介教授（人文学研究所）は、二〇一〇年一月六日大阪発、パリ第七大学及びフランス国立図書館に於いて比較文学国際シンポジウム出席及び資料収集を行い、二〇一〇年一月十五日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年一月十日大阪発、河北省文物研究所に於いて北魏舍利の蛍光X線分析を行い、二〇一〇年一月十六日帰国。
。山崎岳助教（附属東アジア人情報学研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年一月五

日大阪発、ムスリム墓地、海南省博物館、漢門文書館等に於いて東アジア海域交流史関係史料調査を行い、二〇一〇年一月十八日帰国。

。田中雅一教授（人文学研究所）は、受託研究費により、二〇一〇年一月三日大阪発、コロンボ市内に於いて民族紛争と環境問題についての情報収集、プットラム地域に於いて国内避難民と環境問題の調査、コロンボ大学に於いて文献調査、バットイカロー地域、トリンコマリ地域等に於いて国内避難民と環境問題の調査を行い、二〇一〇年一月二十四日帰国。

。岡田暁生教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年一月三十日大阪発、ドレスデン・ゼンバー歌劇場に於いてオペラ資料調査、ウイーン国立図書館に於いて一九一〇年音楽雑誌の調査を行い、二〇一〇年二月六日帰国。

。山室信一教授（人文学研究所）は、二〇一〇年二月四日大阪発、韓国日本学会に於いて国際学術記念シンポジウムにおける講演、討議及び研究打合せ、

漢陽大学に於いて資料調査を行い、二〇一〇年二月六日帰国。

。伊藤順二准教授（人文学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年二月一日大阪発、グルシア国立図書館及び国立史料館に於いてロシア帝国支配地域における民族知識人形成と大学網の発展に関する現地調査と史料収集を行い、二〇一〇年二月十一日帰国。

。矢木毅准教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年二月十八日大阪発、延世大学校・国学研究院に於いて高麗時代史に関する研究発表及び研究打合せを行い、二〇一〇年二月二十二日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究所）は、文部科学省科学研究費補助金（一部先方負担）により、九月十五日大阪発、国立成功大学に於いて敦煌学と言語学に関する講義及び敦煌学に関する研究計画の指導に協力し、中国国家図書館に於いて中国古文獻学研究国際検討会に出席及び敦煌写本の調査を行い、二〇一〇年二月二十八日帰国。

。小野寺史郎助教（附属現代中国研究センター）は、二〇一〇年三月一日成田発、中央研究院近代史研究所等に於いて近代中国に関する資料収集を行い、二〇一〇年三月六日帰国。

。小池郁子助教（人文学研究部）は、受託研究費により、二〇一〇年二月八日大阪発、ロッカントリー（ジッチー）地区及びチャースルトン・カレッジ・エイブリー研究所に於いて多文化共生、観光開発、マイノリティ文化保全と環境問題に関する資料文献収集および実地調査を行い、二〇一〇年三月八日帰国。

。藤井正人教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年二月二四日大阪発、ケーララ州中部トリチュール周辺に於いてヴェーダ伝承及び写本の調査を行い、二〇一〇年三月八日帰国。

。梶原三恵子助教（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年二月二四日大阪発、ケーララ州中部トリチュール周辺に於いてヴェーダ伝承及び写本の調査を行い、二〇一〇年三月八日帰国。

。二〇一〇年三月八日帰国。

。日下涉助教（人文学研究部）は、大学運営費（一部先方負担）により、二〇一〇年一月二九日大阪発、地方行政機関、市街地商業施設、農村等に於いてフィリピンにおける「地方的世界」に関する現地調査、フィリピン大学、アテネオ大学等に於いて二重公共圏の民主主義に関する調査、ケイン市クバオ地域のインターネットカフェ等において東アジア・東南アジア諸国におけるインターネットカフェの社会史と比較社会学に関する現地調査及びインタビューを行い、二〇一〇年三月十日帰国。

。立木康介准教授（人文学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年二月二五日成田発、Bray of Congress に於いてプロジェクト「ひと概念再構築をめざして」のための資料・文献収集を行い、二〇一〇年三月十二日帰国。

。金文京教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月七日大阪発、北京大学中国古文獻研究中心に於いて中国典籍与文

化国際學術検討会参加及び論文発表、中国国家図書館に於いて中国戯曲関係資料調査を行い、二〇一〇年三月十三日帰国。

。岡村秀典教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月三日大阪発、国会博物館に於いて仏教関連文物の調査、アジヤンター石窟及びカンヘーリ石窟において石窟寺院群の調査を行い、二〇一〇年三月十四日帰国。

。向井佑介助教（附属東アジア人文情報学研究センター）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月三日大阪発、国会博物館に於いて仏教関連文物の調査、アジヤンター石窟及びカンヘーリ石窟において石窟寺院群の調査を行い、二〇一〇年三月十四日帰国。

。高田時雄教授（東方学研究部）は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月九日大阪発、上海図書館に於いて図書館所蔵敦煌遺書の調査を行い、二〇一〇年三月十六日帰国。
。ウィットテルン、クリスティアン准教授

(附属東アジア人文情報学研究センター)は、二〇一〇年三月十日大阪発、Virginia University に於いて Cultural Crossing 国際会議に出席及び研究報告' Post Conference Workshop に参加し、二〇一〇年三月十六日帰国。

。小池郁子助教(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月十五日大阪発、ソウル郊外に於いてソウル郊外での軍隊と社会運動のトランスナショナルリティについての調査を行い、二〇一〇年三月二十日帰国。

。山室信一教授(人文学研究部)は、二〇一〇年三月十四日大阪発、復旦大学に於いて連続講義及び史料調査を行い、二〇一〇年三月二一日帰国。

。田中雅一教授(人文学研究部)は、二〇一〇年三月四日大阪発、ロンドン大学、アムステルダム大学等に於いてインド系移民調査とインド文化の受容に關する調査を行い、二〇一〇年三月二一日帰国。

。稲葉稜教授(東方学研究部)は、二〇一〇年三月九日大阪発、ウィーン大学

に於いてアフガニスタン歴史地理に関する共同研究及びワークショップに参加し、二〇一〇年三月二二日帰国。

。加藤和人准教授(人文学研究部)は、二〇一〇年三月二十日大阪発、International Cancer Genome Consortium に於いて国際がんゲノムコンソーシアム(ICGC) 第二回ワークショップに参加し、情報交換および提言を行い、二〇一〇年三月二五日帰国。

。金文京教授(東方学研究部)は、二〇一〇年三月九日大阪発、成均館大学東アジア学院に於いて東アジア比較文化に関する連続講義及び学会に出席し、二〇一〇年三月二五日帰国。

。高田時雄教授(東方学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月二十日大阪発、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所に於いてロシア所属敦煌遺書の調査研究を行い、二〇一〇年三月二九日帰国。

。船山徹准教授(東方学研究部)は、二〇一〇年三月二六日大阪発、政治大学に於いて研究集会「六一七世紀漢語文化圏の印度仏教思潮」に出席及び発表

を行い、二〇一〇年三月三十日帰国。

。竹沢泰子教授(人文学研究部)は、文部科学省科学研究費補助金により、二〇一〇年三月二二日大阪発、ワシントン大学に於いてアジアの人種・エスニシティに關する専門家と情報交換及び資料収集、カリフォルニア大学ロサンジェルス校に於いてアジア系アメリカ人のアイデンティティに關する講演及び資料収集を行い、二〇一〇年三月三一日帰国。

外国人研究員

。WINNER Andreas カリフォルニア大学ロサンゼルス校社会学教授
エスニシティと人種…理論的および実証的探究
(文化生成研究客員部門)

受入教員 竹沢教授
期間 五月二八日〜八月二七日

。FITZGERALD Timothy スタート
ング大学言語・文化・宗教学部教授
現代日本の宗教と民俗世界
(文化連関研究客員部門)

受入教員 田中雅一教授

期間 七月六日～二〇一〇年一月五日
。劉 曉 中国社会科学院歴史研究所研究員
元代の社会と文化

(文化生成研究客員部門)
受入教員 金教授
期間 八月三十一日～
二〇一〇年三月一日

。周 東平 厦門大学法学院教授
犯罪と刑罰に関する比較研究

(文化連関研究客員部門)
受入教員 富谷教授
期間 二〇一〇年一月二一日～
七月二十日

。GIOVANNI Verardi イタリア国立
アフリカ・東洋研究所 (ISIAO) 研究員
インドにおける仏教の危機と没落に関する研究

(文化生成研究客員部門)
受入教員 稲葉教授
期間 二〇一〇年三月二二日～
九月二二日

招聘外国人学者

。ESPOSIT, Monica
道蔵輯要の研究

受入教員 麥谷教授
期間 二〇〇六年四月一日～
二〇一〇年三月三十一日 (継続)

。梁 會錫 国立全南大学校教授
日本における中国古典文学研究の現状調査

受入教員 金教授
期間 四月七日～二〇一〇年二月十日
。鞏 文 中国社会科学院考古研究所副研究員
三～六世紀の装身具からみた東アジアの文化交流

受入教員 岡村教授
期間 八月十一日～十一月五日

。FLÉVÉ, Nicolas Bernard フランス国立極東学院教授
千利休の茶室―その建築と時空間

受入教員 田中雅一教授
期間 十月一日～
二〇一〇年九月三十日

。薛 夷風 厦門大学法学院講師

日中私法比較研究

受入教員 富谷教授
期間 二〇一〇年一月二十日～
二〇一〇年七月三十一日

外国人共同研究者

。SCHERRMANN, Sylk Ulrike
青島旧蔵ドイツ語文献中の法制関係資料の調査

受入教員 岩井教授
期間 四月十五日～
二〇一〇年三月三十一日

。ANDREANI, Fabiana イタリア国立
東方学研究所研究員
認知意味論から見た日本語とイタリア語の直示移動動詞における比較研究

受入教員 田中雅一教授
期間 四月二四日～九月三十日

。CAMPAGNOLA, Francesco イタリア国立東方学研究所研究員
日本におけるイタリア近代哲学の受容

受入教員 田中雅一教授
期間 四月二四日～
二〇一〇年三月三十一日

。馬 駿 フランス社会科学高等研究院

(EHSS) 博士課程

梁啓超の政治保守主義と清末中国政治の展開

受入教員 石川准教授

期間 六月一日～七月三十一日

。FORTE, Erika Angela ウィーン大
学芸術史研究所研究員

七～十世紀中央アジアの美術史・考古学

受入教員 稲葉教授

期間 九月一日～九月二十五日

。Mc DONALD, Kate Ph. D. Candidat, University of Californi, San Di-

ego

戦前日本のツーリズムに関する研究

受入教員 水野教授

期間 十月十四日～

二〇一〇年六月三十日

。趙 寛熙 韓国祥明大学校中国語文学科教授

日本所在中国小説資料の調査と研究

受入教員 金教授

期間 二〇一〇年三月三日～

二〇一一年二月十日

外国人研究者

。安 鍾洙

国際結婚夫婦の子共たちの身体観

受入教員 田中雅一教授

期間 二〇〇八年十月一日～

二〇一〇年三月三十一日 (継続)

。ALPERT, Erika Renee
Language and the Marriage Market
in Kyot, Japan

受入教員

田中雅一教授

期間 四月一日～

二〇一〇年三月三十一日

。葛 奇蹊

内藤湖南における文化ナショナリズムの形成について

受入教員 山室教授

期間 四月一日～九月三十日

。GREENE, Eric M.

唐代以前の禪観実践

受入教員 船山准教授

期間 四月一日～

二〇一〇年九月三十日

。WITS, Casper

中国禪仏教の語録類

受入教員 船山准教授
期間 十月一日
～二〇一一年三月三十一日

。張 德偉

大藏經の普及と明代社会

受入教員 船山准教授

期間 十月一日～

二〇一〇年九月三十日

。何 嘉

環境の文化人類学について

受入教員 田中雅一教授

期間 十月一日～

二〇一〇年九月三十日

。李 愛蘭

植民時代に朝鮮人男性と結婚した日本人女性の文化人類学的研究

受入教員 田中雅一教授

期間 十月一日～

二〇一〇年三月三十一日

漢字情報研究センター講習会

。二〇〇九年度漢籍担当職員講習会 (初級)

第一日 (十月五日)

オリエンテーション 岩井 茂樹

漢籍について

井波 陵一

カードの取り方―漢籍整理の実践

梶浦 晋

第二日 (十月六日)

工具書について

永田 知之

漢字目録カード作成実習

第三日 (十月七日)

目録検索とデータベースの検索

安岡 孝一

漢籍データ入力実習 (一)

第四日 (十月八日)

和刻本について

文学研究科准教授 宇佐美 文理

漢籍データ入力実習 (二)

第五日 (十月九日)

朝鮮本について

矢木 毅

実習解説

書庫見学・質疑応答

山崎 岳
井波 陵一

。二〇〇九年度漢籍担当職員講習会 (中級)

第一日 (十一月十六日)

オリエンテーション

岩井 茂樹

経部について

文学研究科教授

池田 秀三

叢書部について

高井 たかね

叢書と漢籍データベース 安岡 孝一

第二日 (十一月十七日)

史部について

藤井 律之

漢籍データ入力実習 (一)

第三日 (十一月十八日)

子部について

武田 時昌

漢籍データ入力実習 (二)

第四日 (十一月十九日)

集部について

人間・環境学研究科准教授

道坂 明廣

漢籍データ入力実習 (三)

第五日 (十一月二十日)

漢籍目録と文献類目

井波 陵一

実習解説

山崎 岳

情報交換

井波 陵一

お客さま

四月二三日 韓国学中央研究院・韓国学

振興事業団 室長 安 章利 他二

名 (李が対応した)

六月二九日 釜山大学校民族文化研究院

所長 金 東哲 他九名 (水野、李

が対応した)

九月十八日 釜山外国語大学校地中海地

域院 研究協力部長 ユン・ヨンス

教授 他五名 (水野が対応した)

十一月二七日 湘潭大学代表团 毛沢東

思想中心教授 李 佑新 他二名

(森、石川、小野寺が対応した)

十二月二日 スタンフォード大学フーバ

ー研究所研究員 郭岱君 (森、石川、

袁、小野寺が対応した)

十二月二四日 UCLA 社会学部教授

Ching-Kwan LEE (石川、小野寺が

対応した)

二〇一〇年三月四日 ケンブリッジ大学

アジア中東学部上級研究員 Caro-

line Stone、Paul Lunde (水野、

稲葉が対応した)

二〇一〇年三月十五日 北京師範大学歴

史学院教授 張昭軍 (森、石川、袁

が対応した)

「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」

人文科学研究所では、文部科学大臣の認可を受けて、二〇一〇年度（平成二二年度）より共同利用・共同研究拠点としての活動を開始します。

これまで全国共同利用研究所となっていたものを含めて、国立大学附置研究所の多くが共同利用・共同研究拠点に認定され、研究者コミュニティの協力参加を得ながら、関連研究者に開かれた研究体制を築いていくことになりました。

人文科学研究所も、従来の研究体制を基本的に維持しながら、研究の新たな方向を探るために、二〇〇九年に「人文学諸領域の複合的共同研究国際拠点」の申請を行い、人文学の広い領域を対象とする唯一の拠点として認定を受けました。

今後、研究所の伝統を活かしつつ、人文学および関連分野の研究者による共同研究を進めると同時に、施設や所蔵資料、データベースを広く内外の研究者の利便に供することにより、新たな研究領域、研究課題に取り組む予定です。人文学の基礎的研究を踏まえつつ、

世界的視野から複数文化の生成、変動、相互交渉等を研究し、地球社会の調和ある共存に資する学術的知見を提供することを大きな目的として設定しています。

拠点における共同研究としては、二つの種類を設けています。共同研究の課題および責任者（班長）を公募する「共同研究(A)」、共同研究班の研究者（班員）の全部または一部を公募する「共同研究(B)」の二種類です。拠点の運営、公募研究プロジェクトや公募研究員の選定に関しては、所外・学外委員を加えた運営委員会、共同研究委員会で審議のうえ決められます。

二〇一〇年度（平成二二年度）からの「共同研究(A)」については、次のテーマに関連する研究プロジェクトを公募することとしています。

- ・ テーマ1 「人文科学の基礎研究」
- ・ テーマ2 「複数文化の接触」
- ・ テーマ3 「現代社会と人文科学」

これらの共同研究は、原則として三年を期限とする研究を行い、論文集の刊行、シンポジウムの開催などの形で研究成果を公表することになっています。

人文科学研究所における共同利用・共同研究拠点の活動に注目していただくとともに、積極的なご協力をお願いします。

フィクション論のわかりにくさ

大 浦 康 介

「虚構と擬制——総合的フィクション研究の試み」と題した共同研究をこの三月に終え、成果をまとめようとしているところである。しかしこの共同研究、五年の長きにわたったが、いまだに班員と問題意識を共有できたという自信がない。一部のコアメンバーは別として、フィクション論とはそもそも何なのか、そのどこが認識論的にスリリングなのかといったごく基本的な部分について合意が形成されたようにあまり思えないのである。困った、情けない話である。班長である私にその責任があることはいうまでもない。しかし研究会の個別事情を離れても、フィクション論というのはどうも理解されにくいようだ。

思うに、「フィクション論」というと何かわかったような気になるところがかえってたちが悪い。まず、世にフィクションと見なされているもの（小説、演劇、映画等）を論じれば、たとえどんな論じ方をしよう（作品論であれ、作家論であれ）フィクション論だと

いう初步的な、しかし根強い誤解がある。逆にいわゆるフィクションを主に論じなければフィクション論にはならないというのも誤解である。フィクション論が扱うのはフィクションではなくフィクション性、虚構ではなく虚構性（虚構を虚構たらしめている属性）であるから、その問いは「ノンフィクションとは何か」という問いとパラレルである。しかも叙情詩、音楽、絵画、写真、歴史叙述といった、一見フィクション概念とは相容れないようなジャンルや、境界例となるような作品こそが、フィクション論的には「噛みごたえ」があるのだともいえる。

虚構性の研究というと、いかにも抽象的で、とらえどころがないという印象を与えそうだが、「フィクションとは何か」を問うこの「ど真ん中」の研究は、たしかに、フィクション論のなかで重要ではあっても、もつとも面白い研究であるとはいいたい。この問題にフォーカスを絞りすぎた従来の専門的研究が、フィクション論を幾分とつづきにくいものにしたことも事実である。フィクション論の面白さはむしろここから派生するサブテーマにある。「遊び」、「演技」、「模倣」、「シミュレーション」、「本当らしさ」、「リアリティー」といったタームで表現されるテーマ群がそれだ。フィクション論はまた、最終的には、具体的な作品や文化

現象の解明に資するものでなければならぬ。

定義の問題とは別に、フィクション現象の外延の画定の問題もある。それとして認知されたフィクション（文学、映画、ゲーム等）や法的擬制（リーガル・フィクション）だけでなく、ある種の制度や慣習（貨幣制度、祭り、宗教儀礼など）までフィクションに含めるのか。われわれが日頃いなく妄想や白日夢はどうだろうか。ものまね、仮装、変装はどうか。こう考えてくると、われわれの生活がいかに広義のフィクション現象に満ちているかがわかる。妄想癖のある私などは、人生の半分を虚構世界で過ごしているといっても過言ではない。

フィクション現象を広くとれば研究の精度は落ちかねない。とはいえ「すそ野」にこそ面白い対象は転がっている。悩ましいところである。今回も（？）わが班の報告書は全体として妥協の産物となりそうである。いつになったらそうでない報告書が上梓できるのか。周りにいる人間には悪いが、このところ嘆息しきりである。

石窟研究の「うち」と「そと」

安藤 房枝

「東アジア初期仏教寺院の研究」と題した研究班が、今年度から始まる。

人文科学研究所に保管された雲岡石窟の資料整理作業を中心に据えつつ、石窟寺院の枠組みを超えて広く東アジアの仏教遺跡を扱うものである。

思えば私が雲岡石窟を研究対象に選んだ理由は、そこに表された仏教造像がもつとも「中国らしからぬ」風格を湛えたものだっただからだ。異国情緒に溢れたヒンドゥー神像や、衣の下の充実した肉体の存在感。北京留学中に何の予備知識もなく訪れた雲岡の仏たちは、国籍不明の言いあらわしがたい魅力をはなつていた。

周知のように、雲岡彫刻の建築意匠や菩薩の服飾などには、ガンダーラ美術はもちろん、ペルシア、ギリシアにまで遡る要素が随所に見いだされる。もともとインド・中央アジアの文物に漠然とした憧憬を抱いていたためか、図版を眺めては仏教東漸の遙かな道程に思いを馳せていた。この石窟が「西方影響」の一語で

は到底読み解くことができないことに、ようやく気が付いたのは修士課程に進学した頃だろうか。ガンダーラからの図像影響という視点で「そと」側から眺めていた雲岡石窟に、一転して今度は「うち」側から取り組むこととなった。

折良く二〇〇五年に山西省大同市で初の雲岡石窟に関する国際学会が開催され、学会参加者は一般観光客の入ることのできない窟内部の見学を許可された。外とは全く違う空気の流れる石窟内部は、まさに聖性を持った寺院空間として機能していたことを体感できる場であり、この石窟が仏教彫刻や図像を単独で扱うことでは解決できない問題を多く秘めていることを臆げながらも感じさせるものであった。初訪の折に目の当たりにした雲岡の五大仏も庄巻であったが、この頃から石窟空間の機能という方向へ関心が向き、図像プログラム構成という問題へと研究方針が収斂されていた。何よりこの研究班では「うち」へ向かった自分の視点を再び「そと」へと向け直して、従来の石窟研究の枠組みよりも更に広範な視野で取り扱うことが求められるのである。

さて、この研究班の検討対象となるのは全三三冊の大著『雲岡石窟』を編むにあたり用いられた、東方文化研究所時代の写真・拓本・測量図等の資料である。

検討作業の下準備のために、こうした資料をおさるおそる引つ張りだしてみると、この報告書が実に多方面に目配りを利かせた、行き届いたものであることを実感する。そして記述の細部が絶えず変化し修正されている様子からは、七次に渡る現地調査はもろんのこと、報告書の編集作業それ自体が石窟研究の方法論の模索と確立の過程であったことが読み取れる。とりわけ水野清一、長廣敏雄両先生を主軸としつつ、多方面からそれを支えた所員諸氏の存在は大きい。石窟研究が既存のいずれの学問分野の中にも収まりきらないことを考えると、研究所の環境は、まさにうってつけの場であったと言える。資料整理を通じてその過程を追体験することは、今後の石窟研究のあり方を見つめるにあたり、何よりも大きな財産となるだろう。

最初に「そと」から眺めていた時には、報告書に記された膨大な「成果」と「学説」にばかり関心が向きがちであり、聳える高峰の前に立ちすくむような思いがしたものであるが、「うち」から見直してみると高みへと至る道程が試行錯誤と紆余曲折を経たものであることがよくわかり、ひとつひとつの学説に血が通っていきように感じられる。一枚一枚の調査カードや測量図に走る鉛筆の書込みを目にした時は、まさに石窟彫刻の鑿跡に初めて触れて、嘗て無名の工人の手が確

かにこの形を刻み出したのだと実感した瞬間と同じように、背筋の伸びる思いがした。そしてこうした研究の痕跡のひとつひとつが、ちょうど彫刻の一断片と同じように、貴重な文化財であることを改めて認識した。

研究所の収蔵庫に保管された彫刻断片の一部は既に京都大学総合博物館で公開されたが、二度と行うことのできない大規模な発掘・測量調査の資料は、やはり研究所の持つ「たからもの」であろう。例えば、報告書に掲載されているガラス乾板写真は一枚絵としての完成度の高さが要求されたものであり、カメラマンの羽館易は見事にそれに答えてみせた。だがこの他に大量に撮影されたブローニーや35mmの写真は、記録的意味合いが強く、発掘調査過程を詳細に撮影したもの、当時の風俗や暮らしぶりを捉えたものなど、別の側面において資料的価値の高いものである。

雲岡石窟の研究史、とりわけ美術史の分野においては、五大仏の尊格や編年問題、仏像様式の中国化の問題といった論点を中心に議論がなされてきたが、石窟が造営されてから現状へと至るすべての過程が研究の対象になり得るものである。これらの資料からどれだけ多くの情報を引き出すことができるか、研究班での活動を通じて丁寧に取り組んでいきたい。

西部戦線戦跡旅行準備次第

伊 藤 順 二

共同研究班「第一次大戦の総合的研究に向けて」は、二〇〇九年度で一区切りを迎える。これを機に、というわけでもないが、班員有志で戦跡旅行を行うことになった。旅行したのは次年度だが今年度末に下調べと準備を進めたので、今回はその話をしたい。

授業で第一次大戦の映像をちよつと流す場合、一番簡便なのは英Channel 4のDVD四巻セットだろうか（『映像の世紀 第二集』は中学・高校の授業で使われることも多いらしく、すでに視聴済の学生がかなりいる）。ただし英語のみで字幕もないため、かなり解説を加える必要がある。それでも西部戦線関係はインパクトある映像が多く、英語力に難のある学生も興味を持って見てくれるようだ。

しかし私の授業はロシア関係中心である。Channel 4の四巻十話構成のシリーズでは、ロシア東欧・アフリカと太平洋・オスマン帝国の各戦線に対してもそれぞれほぼ一話分以上の時間を割いているのだが、西部

戦線に比して映像の乏しさは歴然としている。かつての戦場の現在の姿や当時の白黒写真にナレーションを被せるという苦肉の策では、学生の興味を引けない。

共同班の議論の過程で、第一次大戦を西部戦線に代表させてはいけない、ということも繰り返し語られている。にもかかわらず議論が西部戦線に偏りがちなのは、「東部」担当者の一人である私の怠慢はさておき、「東部」における大戦表象の希薄さも手伝っていると思われる。たとえば緒戦でドイツ軍が大勝したタンネンベルグに戦後、記念碑が建てられ、「戦勝」記念日にかつての軍司令官であるヒンデンブルグ大統領が献花を行っていたことは、ジョージ・モッセの著作などにも詳しい。しかし第二次大戦で戦勝記念の建造物はソ連軍によって爆破され、今は瓦礫の山が残るのみである。一般にロシアでは大戦の記憶はその後の革命と内戦の記憶によって上書きされており、記憶の場は二度目の大戦の影に霞んでいる。

翻って西部戦線に眼を向ければ、「戦跡旅行」こそが、大戦イメージ固定化の主犯なのかもしれない。少なくとも一九八〇年代以降、歴史学における記憶ブームと歩調を合わせるように、ベルギーや北フランスの戦跡への旅行者は増加している。博物館の新設、何種類となく出されるHot夫妻の戦場ガイド、旅行者の

出身地別に選ぶこともできるバックツアー、現地で購入できる「トレンチアート」、募金と引替に持つていけるお供え用のポピーの造花。戦場ガイド付属の地図には、イープル周辺に三一〇以上、ソンム戦域に三四〇以上の「戦跡」が散りばめられている。農地に散在する墓地や記念碑には、イギリスのものが目立つ。イギリスは遺体の本国送還を禁止し、現地埋葬を原則としていた。特に元激戦地周辺では、フランスやベルギーの農業の発展を軍用墓地が疎外していないか気になるほどだ。それらは代わりに、イギリス人・カナダ人・オーストラリア人などの旧大英帝国臣民の観光誘致という使命を担っている。

分厚いガイドブックはオスマン帝国の戦場であるガリポリについても出されているが、東部戦線関係のものは寡聞にして知らない。正味一週間の旅行を考えていた我々は、ひとまず定石通りの西部戦線巡りを行うこととなった。それもイープルとソンムのめばしい戦跡をうろつくだけで時間切れになりそうなので、今回はフランスのもう一つの激戦地であるヴェルダンを見送った。戦場ツアーから一息ついたつもりで宿泊するパリやランスだって、その気になって大戦ゆかりの場所を回れば一日では足りない。

荒木映子さんの報告によれば、戦跡旅行ブームはこ

数十年に始まったことではなく、休戦直後に第一の大きな波があったらしい。トマス・クックやミシュランが一九一九年から戦場ツアーを企画し、戦跡観光ガイドを出版している。旅行地としての整備は戦後十年前後に進み、各地に巨大な記念碑が建立されている。

戦跡旅行は現在でも人気のルートである。連休明けの五月十日に日付を設定したが、地方のホテルは平日でもかなり埋まっており予約に手間がかかった。西部戦線戦跡旅行という規格化されたルートは、主に元大英帝国の住民に対して開かれてるように見える。そのなかで我々がどういう経験をしたか、あるいは何を経験し損ねたかについては、来年度に譲りたい。

バターの輪

藤井律之

この三月に、わたくしが参加している「漢簡語彙の研究」班が終了した。漢簡といっても現在は多種多様だが、ここで取り扱ったのは居延・敦煌など、漢代の

辺境から出土した簡牘であり、そうした辺境出土簡に登場する語彙を分析して、その語義を確定させることを目的としていた。

辺境出土簡のほとんどは辺境防衛に関連する行政文書であり、地名・人名・物品名および常套句が多数を占めているのはあるが、検討しなければならぬ簡牘は数万本を超え、残念ながら五年という期間では全ての語義を確定するには至らなかった。そのため、この四月から「漢簡語彙辞典の出版」班を開催して作業を継続するとともに、成果を辞書として出版しようということになったのである。

前研究班および現研究班では、以下の手順で作業を進めている。まず、『居延漢簡釈文合校』に見える語彙を全て抽出して、それを五〇音順に排列したリストを作る。そのリストから班員一人三〇個をノルマとして語義を確定する。その際、『合校』のみならず『居延新簡』や『敦煌漢簡』なども（釈文はもちろん図版も）精査して、他の語義がないか確認する。よってノルマは三〇個であっても、確定する語義は三〇を超えることもあるし、どうやっても語義を確定できないものもあって、なかなか骨の折れる作業である。また抽出してある語彙は班員数の三〇倍どころではないので、担当順が一周したら、もう一度先頭に戻ることになる。

すでに担当者の「輪」は数周回転した。

さて、われわれの研究班は「休み」がない研究班として有名であるらしい。他の所員から「あの研究班は大変らしいね」などとよく言われるし、所内に掲示する研究班の予定表に「休会」と書くものなら非常に驚かれるのである。班長が休めば代行が主催するし、わたくしは代行の代行を勤めたこともある。こうした研究班のペースに慣れっこになってしまい、休会だと逆に落ち着かないという体質になってしまった。その様な開催ペースでも作業は遅々として進まなかった。それは班員が怠惰だからではなく、語義確定のために盛んに意見を出し合っていたからである。

しかし、ここ最近大きな変化があった。以前は、余程クジ運のよい人でない限り、担当分を消化するのに三〜四度の研究会を要していたが、一人の担当分が二度の研究会で消化できる様になってきた。参照できる成果が蓄積されてきたことにより、「輪」が軌道に乗ったのである。今まではペースが上がらないことに悶々としていたが、最近では、ペースの早さに当惑しつつ原稿を用意している。さらに「輪」の回転スピードが上がれば、一度の研究会で複数の班員が担当分を消化できるだろうし、いずれは、某童話のように班員が溶けてバターになってしまうのではないかと馬鹿な

ことを考えたりもする。

本研究所はいわゆる「拠点化」によって、外部からの研究班参加が従来より容易になった。われわれの研究班もその恩恵を受け、担当者の「輪」は一層大きくなった。輪の中にはベテランの研究者はもちろん、若い院生や留学生も含まれている。仮に溶けてバターとなったとしても、それで作ったパンケーキは、きっと豊潤な味わいを有しているはずである。

哈燕を訪ねて

古 勝 隆 一

縁あって天下の哈仏燕京学社（略称「哈燕」、燕は平声）に訪問学者として一年間、籍を置かせていただいた。アメリカのことは何一つ知らずに、英語もろくに話せず、しかも家人を帯同して赴いたので、初めこそさまざまな局面においてとまどうことが多かったが、しかし、彼の地の優れた中国学を見聞できたのは、ありがたい経験であった。

何をしてきたのか、と問われれば、アメリカを、英語を、そして彼の地の中国学を理解しようとし、英語を徹底的に習い、宿題のきついプロセミナーを聴講し、訪問学者を集める研究会の世話役を引き受け、哈燕の各種行事に参加し、また子供の学校に出向いたり、普段、国内にいても大して活動の多くない私としては、かなり充実した一年であった。惜しげもなく経費を支給してくれた哈燕には心から感謝している。

帰国して幾ばくかの時が経った今、しばしば妄想することがある。「もし現在、二〇一〇年、私が日本の

大学を卒業する二十二歳の若者で、中国学の研究者を目指すとしたら、どこの国の大学院で勉強したいか？」二十二歳であった一九九二年当時、実に視野が狭く、日本で学ぶこと以外、考えたこともなかったが、ある程度「国際漢学」の実態を了解し得た今、もしも私に複数の選択肢があるのなら、どのような判断を下すのであろうか。

（一）中国、（二）アメリカ、（三）台湾、（四）日本。その優先順位が、妄想の問いに答える妄想の答えである。本場の中国で中国研究をしたいなどということは、学生時代、思ってもみなかったが、今ならそれを強く願う。アメリカで若いときから奨学金獲得や入試をめぐって揉まれるのは、人生に活気を与えるはずだし、外からの視線で中国を見ることは面白い。また、優れた漢学の伝統を有する台湾で、大陸と日本とを両にらみにするのもよい。

自分自身が教育にも携わる日本の大学の優先順位が低いのは、どういうわけか。それはただ私が天の邪鬼なので、むしろ環境を変えて挑戦したいという気持ち強いだけであり、日本の研究水準が低いということでは決していない。わが研究所の所員をはじめ、優れた日本の漢学家が多いことは百も承知だ。

ただ、気になることはある。現代日本の中国古典教

育は、どこか澁澁としていない。中国のプレゼンスが日に日に大きくなりつつある今日、中国研究の意義がいよいよ増している今日、中国研究に閉塞感など無縁であるはずの今日、中国哲学・中国史・中国文学を講ずる日本中の大学の教室は、もっと澁澁としていてしかなるべきだ。

まずは、自分にできることとして、訓読教育をやめてみようかと思う。訓読は、あまりにも威厳に満ちており、留学生や初心者を萎縮させてしまう。訓読の壁に守られ、すでにグローバル化した中国学との対話を軽んずるなら、日本の中国学は、必然的に知のガラパゴスとなる。訓読は確かに日本の文化遺産であり、よいところ、便利などころもある。しかし、それが閉塞感の一因となっていないか。「訓読は玄界灘に捨ててきた」と語った倉石武四郎の気概を受けつぐことは、できぬものか。

アメリカ人の学生が、のびのびと中国古典を暗誦するのを聴いて、自由の風を感じ、訓読の功罪に思いを致した。

考証と検索

王 寺 賢 太

Google Booksとの出会いは衝撃的だった。

二〇〇九年の十月から一年間の在外研究の機会を得て滞在中のパリで、十八世紀フランスの歴史家、レナルの一七六〇年代の手稿、『戦争史』についての論考の執筆にとりかかる矢先のこと。この未刊の手稿が、同時期に執筆された植民と商業の歴史『両インド史』と対をなして、ヨーロッパ「近代」についてのレナルの歴史的・政治的考察の総体を形作ることを明らかにするのが論考の主眼なのだけれど、ある細部が気にかかってしょうがない。問題は、フォリオ版で千頁におよぶこの手稿に付された四頁ほどの序文にあった。

稀代の編纂者——というより「パクリ屋」——として名高いレナルにふさわしく、この短い序文がルソーの『サン・ピエール師の永久平和論抜粋』とか、ヴォルテールの『哲学辞典』とか、『百科全書』の項目などを下敷きにして書かれているのは見当がついていた。ところがひとつ、ルソーへの反論の部分で引き合いに

出される「とある哲学者」というのが、誰なのかわからない。しかもこの哲学者、なかなかのヒネクレ者で、人間たちは本性的に善であるがゆえに、己の悪徳を美名のもとで心置きなく発散させるためには、是非とも戦争を必要とする、などと論じているのである。

だとすると、これは性悪説に立つバスカルやラ・ロシュフコーといった十七世紀末のジャンセニストたちではないらしい。「哲学者」というのだから、モンテーニュからバールまでの懐疑論者たちの誰かか、と探りを入れてはみたものの、どうやら該当するような考察は見当たらない。最後には、とうとう知り合いの研究者たちに尋ねてみた。いずれも現在のフランスの十八世紀思想・文学研究では第一線に立つ、パリの大学教授たちである。みなさん誠実に対応してくれたのだけれど、結局見当がつかず、戸惑うばかり。

しかし、解答はほどなく電子メールで飛び込んで来た。知り合いの知り合いが、思いもかけぬレフェランズを送ってくれたのだ。件の哲学者は、ソアム・ジェニンズなるイギリス人。問題のテクストはこの著者の仏訳されたある論文の一節で、一七六八年刊の『文藝雑稿』所収。但し、初出は雑誌『外国新報』一七六一年七月号のようだ。

思いがけぬ疑問の解決はうれしかったものの、なん

とも複雑な気持ちにさせられる出来事ではあった。実際、私が一人でこの雑誌記事を見つけるには、よほどの僥倖が必要だったはずだから。レナルについて、ベネディクト会士の大資料集から流行の娯楽向けの小冊子まで、あらゆる書物に通じていると評したのはヴォルテールだが、その膨大なテクストが歴史家の仕事のあちこちに痕跡を残しているとしたら、彼がいかにして、何を、同時代を行き交う言説のあいだで語っていたのかを明らかにする文献考証の仕事は、まったく超人的な労力を要するだろう。とはいえ、こんな些細なレフェランズを即座に見つけてしまうとは、すごい物知りもいたものだ……

その超人的な学識が Google Books の全文検索サービスから得られたのを知るには、それほど時間はかからなかった。恥ずかしながら、私はそれまでこのサービスを使ったこともなければ、このサービスを通じて十八世紀ヨーロッパの数多くの文献が全文公開されていることも知らなかったのだ。私にとって、この発見は文字通り衝撃的だった。なるほど、まだ不備は数多いとはいえ、この検索サービスは、これまで文献考証の大きな柱をなしてきた源泉資料の発見や、同時代の議論のコンテクストの再構成に絶大な威力を発揮するからである。なにしろ、以前なら図書館で古い書物を

ひっぱり出し、その書物を読んでようやくたどり着いたはずの源泉資料が、下手をすれば書物を手にとって目を通しめせずに、自宅に居ながらに確定できてしまうのだから。

そんななか、今年（二〇一〇年）に入ってまもなく、レナルの名著『両インド史』の批評校訂版の第一巻が刊行された。編纂作業開始から二〇年余、ようやくなつた公刊で、一月にソルボンヌ大学で開かれた小さな記念の集まりには、この編集に携わってきたヨーロッパ各国の学者たちが一堂に会した。その和やかな雰囲気なかで、私は随分以前に参加した編纂委員会の折隣に座つたある高齢の研究者が小声で、さて、この批評校訂版が五〇年もつかどうか、と呟いたのを思い出していた。しかし、問題はもはや、単に『両インド史』や十八世紀フランスの研究水準の如何にはとどまらない。長く大学での文献学的研究を支えてきた考証の手法とエートスが、情報テクノロジーにもとづく検索機能にとつてかわられようとしている現在、紙の上で確定されたテキストとその注釈が、いったいどのくらい「もち」うるのだろうか。

ともあれ、衝撃の出会ひ以来、Google Books は私の仕事に欠かせない道具になってしまった。すでにここ数年のあいだに、行きつけのバリの図書館はどこも

利用者がインターネット接続できる環境を整え終えている。それを幸いと言うべきなのか、私にはよくわからないのだが。

共同研究会三昧あるいは数値化の試み

田 中 雅 一

人文科学研究所は二〇一〇年度から正式に全国共同利用・共同研究の拠点としての活動を開始し、これまでの研究体制も大きく変わることになった。二〇〇九年は人文研八〇周年であり、また社会人類学部門創設五〇周年にあたる。人文研においては言うまでもないが、社会・文化人類学の分野でも共同研究という手法は重要な役割を果してきた。この機会に、共同研究について考える資料を提供してみたい。私がここで試みたいのは、共同研究という方法の意義や成果内容の評価といった質的側面からではなく、研究者一人当たりの共同研究への参加数や成果の公表率など量的側面か

らの考察を行う前段階としての、資料の数値化である。まずは、一九八六年から二〇〇九年までの二四年間の研究生活で私が参加してきた研究会を材料に行ってみたい。

人類学は海外調査を重視していることもあり、大型の科学研究費によるプロジェクトが盛んである。こうしたプロジェクトは、調査と共同研究会の二本立てであることが多い。したがって以下の考察には、科研による研究会も含めている。反対に、予算の裏づけがない研究会やメンバーが固定していない研究会は含めなかった。

二四年間で私は六六の研究会に参加している。一つの研究会はおよそ三年続くが、延べにすると一九一会となる。毎年二・八の新しい研究会に加わり、常時八・〇会の研究会に所属していた。所属する研究班の数は徐々に増えていき、最初のピークは一九九四年から九五年にかけてである。当時私は一一の研究会に属していた。そのつぎのピークは二〇〇七年で一三である。

すべてに毎回出席というわけにはいかず、名目的なものも出てくる。これを共同研究の成果である論文執筆の有無で見てみることにしよう。

二〇〇九年時にすでに終了していた研究会は四九だ

が、このうち成果が出たのは三三（六七％）である。この三三のうち二九の研究会に論文を執筆している。執筆率は八割だから高いともいえるが、五つに一つは執筆を断念している。また、参加していた研究会数全体で考えると、およそ六割の執筆率ということになる。すなわち、毎年八つの研究会に出ているとすると、そのうちの五つの研究会に論文を書いているということになる。

二四年間の私の論文総数九〇本から考えるとおよそ半分の四六本が研究会の成果となる論文である。平均すると、毎年二本共同研究の成果を公表していることになる。三三の研究会の成果となる論文数が四六本になるのは、ひとつの研究会で複数の論文を執筆したり、英語で書き直したりしているからである。一つの研究会に一本、すなわち単純に三三本執筆したとすると、 $33 \div (46 - 33) \approx 2.5$ を論文総数として、これを母数にすると、論文総数の四三パーセントが共同研究の成果で、毎年一・四本（ $33 \div 24$ ）執筆しているということになる。

つぎに、主催機関について見てみることにしよう。ベスト三は、人文研二五、民博一七、東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）八で、合計すると五〇、六六の研究会のうち八割を占める。これら

に絞ると、人文研の研究会が半分を占め、毎年三つの研究会に所属していることが分かる。民博主催の研究会は、外部の者は一度に三つしか参加できないという制限があるため多いときで三つ、A A研は制限がないため最大四つに属していたことがある。

以上の数字をさらに単純にして一年間の活動を描写するとつぎのようになる。常時八つの研究会に参加していて、毎年新規の研究会三つに参加し、三つの研究会が終了する。そのうち半分に成果のための論文（一・五本）を書く。さらにそれと別に二本の論文を書く。これが私の二四年間の共同研究人生ということになるのか。今後、共同研究会も科研のプロジェクトもますます盛んになるであろうから、こうした状態はこれからも続くことだろう。ただ、私の数値が典型的とは思わない。私は一九八六年八月に国立民族学博物館（民博）に助手として就職し、その後人文研に転出している。どちらも共同研究を独創的な研究方法とみなすユニークな研究機関である。また、人類学の研究機関には共同研究を売りにする機関が少なくない。民博だけでなくA A研も研究会が活発に行われている。つまり、私の場合所属機関と専門がともに、共同研究という方法と密接な関わりをもつものだったため、数値は高めになっていると考えられる。

なお、資料の詳細は田中のホームページに掲載されている共同研究会の記録 <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/seminars.html> と研究成果（論文） <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~shakti/publications.html> を参考にした。

クサンテン考古学公園

宮 宅 潔

二〇〇八年の十月から、フンボルト財団の奨学研究員として、ドイツ・ミュンスター大学で一年間研修する機会を得た。ミュンスターのあるノルトライン＝ヴェストファーレン州には、ケルンをはじめとして、ローマ時代に建設された都市（軍団基地）に起源を持つ町がいくつもある。ライン川沿いの都市クサンテンにも、ローマ時代の軍団基地を復原した公園があると聞き、四月のよく晴れた日曜日に出かけてみた。

デュイスブルクで電車を乗り換え、菜の花畑を眺めながら四五分ほどローカル線に揺られると、クサンテ

ンの小さな駅に着く。遺跡は現在の市街の北に広がっていて、そちらに向かうバスを待つが、来るはずのバスが何時までたつても来ない。そこで駅からとぼとぼと、プラタナスの並木を抜けて歩いてゆくと、しばらくして城壁と東南角の望楼が見えてきた。基地はローマ軍の伝統にのっとり、周囲を城郭に囲まれた正方形の平面プランをもっている。各辺の長さは約二キロほどで、ライン川に面した東壁だけは、川に沿うように城壁が斜めに走っている。その東半分が発掘ののち公園として整備されていて、青々とした芝生が広がる中に、復原された神殿・円形劇場・宿泊所などが並んでいる。西半分は公園とはなっていないが、浴場遺跡をまるごと取り込んだローマ博物館がその一角に建っていて、これは二〇〇八年八月にオープンしたばかりとの由。

日曜日とあってか、公園内には家族連れが目立つ。トীগ風の服を着たスタッフが骨器の作り方を教えたり、当時のボードゲームで遊べたり、と子供向けのアトラクションには事欠かず、「宿泊所」に設けられたレストランでは、ローマ時代の料理も食べられる。夏には「剣闘士大会」も開かれるらしい。車に乗って家族でやってきて、一日ゆっくりと「ローマ」を体験して帰って行く、そんな雰囲気のパークだった。悪くいえ

ばテーマパーク化しているが、博物館はよくできていて、家族が遺跡をのんびり歩き回っている姿は、微笑ましく、うらやましい。しかしふと思えば、その眺めに違和感を覚えないではない。

西暦紀元九年、トイトブルクの森の戦いで、クサンテンからライン川を渡って攻め込んだローマ軍団は、アルミニウス率いるゲルマン軍の前に大敗し、ほぼ全滅した。やがてアルミニウスはゲルマン民族の英雄となり、民族主義の高まった時代には、彼にちなんで「ヘルマン」と名付けられた子供も多かったと聞く。ところが今は、アルミニウスに皆殺しにされた、いわば仇役の基地が親子連れで賑わい、小さな子供たちが興味津々で遺跡の解説などに見入っている。これは一体どうしたことか。さては民族主義の反動か、欧州統合の時代には、ローマ統治下での、民族の共存が学ばれるべき手本とされているのか、などと勘ぐった。

こうした感想を同僚に漏らすと、お前の考えすぎだと笑われた。ドイツ人にとってイタリアは、おいしいジェラートの国、あこがれのバカンスの地、だからみんなイタリアが好きだけさ、第一、ローマの支配は軍事力によるもので、EUとは全く違うじゃないか、と。確かにそうかもしれない。でもローマの支配＝軍事支配＝悪、というのも、キリスト教的な歴史観から

くる偏見に影響されていないか、と食い下がり、その日の昼ご飯は少し長くなった。

一説によると、この公園を最初に訪れた日本人は、人文研の大先輩、故・林巳奈夫教授であるという。林先生は本誌『人文』一八号（一九七八）に「クサンテンの遺蹟公園」という一文を寄せて、整備が始まったばかりの遺蹟公園の様子を紹介し、そして末尾を「次の日、ケルンでクサンテンに行つて来た話をしたら、外国人で訪れたのは私が最初だろう、ということだった。然しまあわざわざ行く程のこともない所だ」といささか皮肉まじりに結んでおられる。それから三〇年を経て、果たして私が何人目の日本人来訪者であったのかは分らないが、幸いにもいくぶん違った感想を持ち帰ることはできた。



書いたもの一覧 二〇〇九年四月～二〇一〇年三月 (氏名五十音順 ●は単行本)

浅原達郎

曹沫之陳の配列

漢初の紀年

曰古 一三三号 四月

曰古 一五五号 三月

安藤房枝

雲岡第6窟の圖像構成について

——仏伝圖像に焦点を当てて—— 東方学報 八五冊 三月

李昇燁

「顔が変る」——朝鮮植民地支配と民族識別

『人種の表象とリアリティ』

日本(近現代)——植民地全般 史学雑誌(二〇〇八年の歴史学界——回顧と展望——) 第一一八編第五号 五月

●解説・編訳 満州地域本邦人在留禁止関係雑件(海外の韓国独立運動史料・三四) 国家報勲処

李太王(高宗) 毒殺説の検討 二十世紀研究 第一〇号 八月

二十世紀研究編集委員会 一二月

池田巧

チベット世界のリアリティ

これから出る本 2009 No.6 三月

書物を数えることば

多田等観とデルゲ版大藏經

これから出る本 2009 No.7 四月

現代中国語カタカナ発音表記法試案

中国語学会第五九回全国大会 十月

俄国収蔵的藏文注音西夏文佛經殘片 No. 8363 試釋

西夏語文與華北宗教文化國際學術研討會 十二月

流砂に消えた王国

翼の王国 四八七号 一月

ムニャ語の格助詞 澤田英夫編『チベット・ビルマ系言語の文法現象1・格とその周辺』 東京外国語大学 三月

西暦一八五三年に記録されたリュズ語の語彙

東方学報 八五冊 三月

石川禎浩

「六・四」から二〇年／民主化の意義どこへ

新河県の中国共产党とその歴史——新河出身の二人の「革命烈士」を中心に 森時彦編『二十世紀中国の社会システム』

晚清「睡獅」形象探源 中山大学学报 二二二期 六月

關於孫中山致蘇聯的遺書 中国社会科学院近代史研究所編『紀念孫中山誕辰一四〇周年國際學術研討會論文集』

京都大学人文科学研究所

九

眠れる獅子(睡獅)と梁啓超
社会科学文献出版社 十月
東方学報 八五冊 三月

伊藤 順 二

カフカスのとりこ——トルストイ以後のカフカス山岳民の表象
人文 五六号 六月

稲葉 稔

ウマイヤ朝のシンド征服

歴史学研究会編『世界史史料』第二卷 七月

ヒンドゥーとムスリム

歴史学研究会編『世界史史料』第二卷 七月

ムスリム商人の活躍

歴史学研究会編『世界史史料』第二卷 七月

泥孰攷

東方学報 八五冊 三月

井波 陵 一

六部から四部へ——分類法の変化が意味するもの

富谷至編『漢字の中国文化』昭和堂 四月

本をめぐる交流——王国維と神田喜一郎

高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店 七月

この人・この三冊(礪波護)

毎日新聞 十月十八日

書評 吳建中等著『中国の図書館と図書館学』

『東方』三四六号 十一月

長崎浩「叛乱論」から見た義和団運動

岩井 茂 樹

漢人と中国にとつての清朝、マンジュ

岡田英弘編『清朝とは何か』(別冊『環』十六) 五月

中華帝国財政の近代化 シリーズ 20世紀中国史 第1巻 東

京大学出版会

広州与長崎 清廷透視中的互市与海外華人 Leonard BU-

LUSSE, et al. (eds.), *Canton and Nagasaki Compared*

1730-1830 : Dutch, Chinese, Japanese Relations. Institute for the History of European Expansion

帝国と互市——一六—一八世紀東アジアの通交 籠谷直人・

協村孝平編『帝国とネットワーク——長期の19世紀』

元代行政訴訟と裁判文書——『元典章』附鈔案牘「都省通

例」を素材として—— 世界思想社十一月

東方学報 八五 三月

岩城 卓 二

書評 藤原龍雄『姫路城開城』 神戸新聞 七月五日

第四章近世編 第六章近世の明延鉉山『大屋町史』 三月

ウィッテルン・クリスティアン

The making of TEI P5 (共著)

Literary and Linguistic Computing 24/3 九月

デジタル漢籍の新しいテキストモデル

東方学報 八五冊 三月

王 寺 賢 太

穏やかさのために 京大広報 六四五号

五月

翻訳 アントニオ・ネグリ『政治論』あるいは近代的民主
政の定礎」別冊情況『二九六八年のスピノザ』

情況出版 七月

書評 もつと空想を！ 石井洋二郎著『科学から空想へ——
よみがえるフリーエ』週刊読書人 七月二十四日

必然性／偶然性——レイ・アルチュセールにおけるルソーと
啓蒙 思想 一〇二七号 十一月

座談会 ルソーの不在、ルソーの可能性（吉岡知哉、坂倉裕
治、桑瀬章二郎とともに） 思想 一〇二七号 十一月

座談会 春日井コモンズ第9回『メディア技術はどのような
コモンズ（共）を出現させることができるか』和田伸一

郎発表へのコメント Studies Forum Series 76

中部大学高等学術研究所 二月

●翻訳および解説 ミシエル・フーコー『カントの人間学』

新潮社 三月

岡 田 暁 生

監修（吉岡洋と共同） 文学／芸術は何のためにあるのか

東信堂 二〇〇九年三月

ロマン派の呪縛と現代音楽の袋小路 大航海 七〇号

二〇〇九年三月

●音楽の聴き方（中公新書） 中央公論社

六月

前近代と超近代のはざま——ヴィルトゥオーソ現象と一九
世紀 ユリイカ 二〇一〇年四月号 三月

岡 村 秀 典

前漢鏡銘の研究

東方学報 八四冊 三月

中国の国家形成における銅と鉄

第二回濱田青陵賞授賞式 岸和田市 九月

東アジア古代の玉器 玉と王權

宮崎県立西都原考古博物館 十月

解説 林巳奈夫著『中国古代の生活史』

吉川弘文館 十二月

景初三年における三角縁神獸鏡の成立

先史学・考古学論究五 二月

漢鏡5期における淮派の成立

東方学報 八五冊 三月

小野寺 史 郎

「中国社会主義文化」としての孫文崇拜

人文 五六号 六月

翻訳 黄興濤

近代中国ナショナリズムの感情・思想・運動
村田雄二郎編『シリーズ二〇世紀中国史一 中華世界と
近代』 東京大学出版会 七月

近代

近代中国の国歌問題——清末から北京政府期を中心に——
中国哲学研究 二四号 十一月

近代「中国」の形成——立憲派と革命派の論争を中心に

歴史と地理――

世界史の研究 二二二号 二月

『中華教育界』記事目録（大澤肇・今井航・小川唯・戸部健と共同執筆） 近代中国研究彙報 三二二号 三月

梁啓超と「民族主義」

東方学報 八五冊 三月

籠谷直人

●帝国とアジア・ネットワーク 長期の一九世紀（共編）

世界思想社 一一月

近代東アジアにおける自由貿易原則の浸透 遠藤乾編 『グローバル・ガバナンスの歴史と思想』 有斐閣 二月

近代東アジアにおける自由貿易原則の浸透と華僑 総合地球環境学研究所・深見奈緒子編 『第三回全球都市全史研究会報告集 生態系からみた都市とそのネットワーク』 三月

Japan's Commercial Penetration of South and Southeast Asia and the Cotton Trade Negotiations in the 1930s: Maintaining Relations between Japan, British India and the Dutch East Indies. Shigeru Akita and Nicholas J. White (eds.) *The International Order of Asia in the 1930s and 1950s*. Ashgate 一一月

梶原 三穂子

On the Gṛhyasūtra of the Vādhūla School. *Journal of Indological Studies* 20/21 十一月

加藤和人

Public engagement in Japanese policy-making: A history of the genetically modified organisms debate. (Shineha, R. と共著) *New Genetics and Society*, 28(2) 四月

パーソナルゲノム時代の研究倫理―国際動向と日本の課題 実験医学 二七巻一二号 七月

生命科学分野研究者の科学技術コミュニケーションに対する意識 ―― 動機、障壁、参加促進のための方策について ―― (標葉隆馬、川上雅弘、日比野愛子と共著) 科学技術コミュニケーション 六号 九月

iPS Cells: Mapping the Policy Issues. (Amy Zarzeczny, Christopher Scott, Insoo Hyun, Jami Bennett, Jennifer Chandler, Sophie Charge, Heather Heine, Rosario Isasi, Robin Lovell-Badge, Kelly McNagny, Duanqing Pei, Janet Rossant, Azim Surani, Patrick L. Taylor, Ubaka Ogbogu and Timothy Caulfield と共著) *Cell*, 139(6) 一一月

Stem cell research policy and iPS cells. (Timothy Caulfield, Christopher Scott, Insoo Hyun, Robin Lovell-Badge, Amy Zarzeczny と共著) *Nature Methods*, 7, 2010 (Published online 21 Dec 2009) 一一月

Familiarity and prudence of the Japanese public with research into induced pluripotent stem cells, and their desire for its proper regulation. (Shineha, R., Kawakami, M., Kawakami, K., Nagata, M., Tada, T. と共著)

菊地 暁

「文化的景観」のポリテクス——石川県輪島市「白米の千枚田」の事例から—— 韓国民俗学 四九号 五月

誰がために海女は濡れる——日本海女写真史略—— 川村邦光編「セクシユアリティの表象と身体」

臨川書店 一二月

智城の事情——近代日本仏教と植民地朝鮮人類学—— 科学史研究 二五二号 一二月

あの日、あの時、あの学会で 関一敏先生の還暦を祝う会編・発行「関さん／先生への手紙」 三月

「共同研究」の不可能性と不可避性——京大人文研における個人的観察からの覚え書き—— 小池淳一編「人間文化研究における連携構築と社会発信に関する方法論の考究」

大学共同利用機関法人人間文化研究機構 三月

金 文 京

高麗本『孝行録』과 中國の二十四孝 『韓国文化』四五号 ソウル大学校奎章閣韓国学研究院 四月

慶應義塾図書館蔵「四郎探母等四種」原典と解題 科学研究費特別推進研究「清朝宮廷演劇文化の研究」研究成果集Ⅱ 四月

おかつば頭考——東アジアの髪型『近畿化学工業界』二〇〇 四月

九—七近畿化学工業協会 七月

晚明文人鄧志諤的創作活動——兼論其爭奇文學的來源及傳播

『經典轉化與明清敘事文學』台北 聯經出版事業股份有限公司 八月

福澤諭吉の漢詩5——团扇に題した詩二首、ふたつの心境

『福澤手帖』一四一 福澤諭吉協会 八月

福澤諭吉の漢詩6——『文明論之概略』の裏面・奔騰する感情

『福澤手帖』一四二 福澤諭吉協会 九月

詩讀系文芸と楽曲系文芸 『中国近世文芸論——農村祭祀から都市芸能へ』東洋文庫 十二月

福澤諭吉の漢詩7——心境の変化と習字の稽古

『福澤手帖』一四三 福澤諭吉協会 十二月

福澤諭吉の漢詩8——友人に贈る詩・人生須く痕有るべし

『福澤手帖』一四四 福澤諭吉協会 三月

仏典漢訳の訓読および仏教文学にあたえた影響

『佛教文学』三四号 三月

『蕙解元西廂記諸宮調』の構成と言語表現について

東方学報 八五冊 三月

久保 昭 博

Le Collage et la figure humaine: autour de *What a life!*

Daniel DELBREIL (ed.) *Raymond Queneau et le corps*.

Calliopées. 十一月

黒 岩 康 博

回顧と展望 日本史・近現代 社会・文化二 史学雑誌

一一八編五号

五月

蒐集家崎山卯左衛門の郷土研究 久留島浩・高木博志・高橋一樹編『文人世界の光芒と古都奈良——大和の生き字引・水木要太郎——』 思文閣出版 十月

小池 郁子

コンタクト・ゾーンとしてのオリシャ崇拜運動 アフリカ系アメリカ人の社会運動とキューバのアフリカ系宗教との境界をめぐって コンタクト・ゾーン 三卷

京都大学人文科学研究所 三月

Changing Orisa Worship: "Anti-White/Christian" Ideology and the Black Relationships with "Africa" in the Yoruba American Socio-Religious Movement. ZINBUN, No. 42 三月

古勝 隆一

注釈と古典

『漢字の中国文化』 昭和堂 四月

劉炫の『孝経』 聖治章講義 中国哲学史研究 三〇号 六月

『隋書』経籍志史部と『史通』雑述篇

東方学報 八五冊 三月

小関 隆

「哀れなカッファイ」とは何者か?…黒い肌のチャーティスト 竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』

岩波書店 五月

高井 たかね

●王禎『農書』農器図譜集訳注稿(未定稿)(共編)

科研費成果報告書 三月

高木 博志

戦争と古都 鴨東通信 七五号

思文閣出版 九月

●文人世界の光芒と古都奈良——大和の生き字引・水木要太郎(久留島浩・高橋一樹と共編)

桜とナシヨナリズム——日清戦争以後のソメイヨシノの植樹(朝鮮文) 洪善杓編『東アジア美術のモダンとモダンテイ

ハッコジェ社 十月

文化財保護のなかの今城塚 遺蹟学研究 第六号 十一月

近代日本の文化財と陵墓——政治や社会との関わりにおいて

考古学研究 第五六卷第三号 十二月

●陵墓と文化財の近代

旧藩意識と「賊軍」慰霊の問題 山川出版社 一月

国学院大学研究開発推進センター編『霊魂・慰霊・顕彰』

錦正社 三月

高階 絵里加

美術逍遙 日本経済新聞

四月二七日、六月八日、六月一五

日、七月一三日、七月二七日、八月二四日、十月五日、十

月一九日、十一月一六日、十一月三〇日、一月四日、一

月一八日、二月一五日、二月二二日、三月二九日

高 田 時 雄

清末の英語學——鄭其照とその著作

東方學 第一一七輯 一月

紹介 榮新江・李肖・孟憲實主編『新獲吐魯番出土文獻』上

下二冊

東洋史研究 六八卷一號 六月

讀まれなかつた古典——大唐西域記 人文 五六號 六月

ロシアの中央アジア探險隊所獲品と日本學者『シルクロ

ド文字を辿つて——ロシア探險隊の文物』 七月

解説 平定西域戰圖『乾隆得勝圖 平定西域戰圖』 七月

漢字の西方波及『漢字文化三千年』 七月

SANGLEY 語研究の一種資料

『閩南文化國際學術研討會論文集』 十二月

解説 平定台灣戰圖

『乾隆得勝圖 平定臺灣戰圖』 十二月

敦煌的語言生活『百年敦煌學 歴史・現状・趨勢』 十二月

「日本所藏中文古籍數據庫」介紹 漢學研究通訊 総一二三期 二月

三月

●『陶湘叢書購入關連資料』

藏經音義の敦煌吐魯番本と高麗藏 敦煌寫本研究年報 第四號 三月

避諱と字音 東方學報 八五冊 三月

竹 沢 泰 子

アメリカ人類学にみる進化論と人間の「差異」——太平洋を横

断した人種論 現代思想 三七卷 四月

●人種の表象と社会的リアリティ(編著) 岩波書店 五月

序——多文化共生の現状と課題 文化人類学 七四卷一号日

本文文化人類学会 七月

Race in Asia, Encyclopedia Britannica's Guide to Black

History 二月

Japan's Minority Peoples, Encyclopedia Britannica's Guide

to Black History 二月

日本社会における人種主義 M—ネット 二—三月

武 田 時 昌

暦と占いのあいだ「天文学史研究会」集録第二回 四月

先秦の惑星観と五行説 別冊神州二〇〇九 十二月

ポピュラー・サイエンスとポピュラー科学史—アカデミック

科学史はポピュラー・サイエンスといかに向き合うか(共

著) 科学史研究二四八 十二月

太白行度考—中国古代の惑星運動論(一) 東方學報 八五冊 三月

三月

田 中 淡

玉座の空間 家具道具室内史 創刊号 五月

中国の宮殿『日本建築は特異なのか—東アジアの宮殿・寺

院・住宅—』国立歴史民俗博物館 六月

Early Style of Chinese Gardens and Ancient Gardens in

Japan, Paradise and Gardens in East Asia, Nara Na-

tional Research Institute and Agency for Cultural Af-

tais.

中国庭園の初期的風格と日本古代庭園 『東アジアにおける

理想郷と庭園に関する国際研究集会報告書』奈良文化財研

究所 十一月

塔のかたち——中国と日本 歴博一五九 三月

田 中 雅 一

講演要旨 セックス——語りたい？語れない？ 京都大学附

置研究所・センター第四回シンポジウム紹介 四月四日

読売新聞

インタビュール 政治家論 第一部 イメージ&メッセージ四

誘惑の効用 京都新聞 六月十二日

スリランカの民族紛争——その宗教的位相 現代宗教 六月

遊びと誘惑 コトワリ——理——二〇号 九月

クロード・レヴィ・ストロースを読む

京都大学新聞 十二月一日

エイジェントは誘惑する——社会・集団をめぐる闘争モデル

批判の試み 河合香史編『集団——人類社会の進化』

京都大学学術出版会 十二月

講演…セックス——語りたい？語れない？ 京都大学・附置

研究所・センターシンポジウム 京都からの提言——二一

世紀の日本を考える 第四回「学問のつながりのユニーク

さ…それから作る明るい未来」報告書京都大学東南アジア

研究所内京都大学「京都からの提言」事務局 十二月

パネルディスカッション…学問のつながりのユニークさ…そ

れがつくる明るい未来 京都大学・附置研究所・センター

シンポジウム 京都からの提言——二一世紀の日本を考え

る 第四回「学問のつながりのユニークさ…それから作る

明るい未来」報告書京都大学東南アジア研究所内京都大学

「京都からの提言」事務局 十二月

コメント…人類学研究所六〇周年記念シンポジウム第一回

「二一世紀アジア社会の人類学…回顧と展望」 南山大学人

類学研究所周刊 第十七—十八号 十二月

戦後日本の米兵と日本人売春婦——もうひとつのグローバリ

ゼーション *Globalization, Localization, and Japanese*

Studies in the Asia-Pacific Region 2 国際日本文化研究セ

ンター 三月

田 中 祐 理 子

病原菌と千里眼 微生物学史のひとつこまから 人文 五六号

六月

立 木 康 介

ナタリー・ジョーデルの報告への序文 ジャック・ラカン研

究 第七号 十月

翻訳 ナタリー・ジョーデル「ラカン派応用精神分析の現在

——施設Ⅱ制度における精神病臨床」 ジャック・ラカン

研究 第七号 十月

露出せよ、と現代文明は言う 第一回「心の時代」とはど

ういう時代か 文藝 二〇一〇年春号 一月

抑圧理論 井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス八身

体・セクシュアリティ・スポーツ』 世界思想社 三月

翻訳 ジークムント・フロイト「ナルシズムの導入にむけ

て」『フロイト全集一三』 岩波書店 三月

翻訳 ジークムント・フロイト「強迫神経症の素因」『フロ

イト全集一三』 岩波書店 三月

富 永 茂 樹

星に願いを 藝文京 一〇九号 四月

ミシェル・フーコー『死に対する権利と生に対する権力』

井上・伊藤編『社会学ベーシックス・3・文化社会学』 世界思想社 七月

〈国民〉の困難—啓蒙、宗教、コミュニケーション

大澤・姜編『ナショナリズム論・入門』 有斐閣 八月

ブリッソーからトクヴィルへ—アメリカ、革命、民主政

三浦・松本・宇野編『トクヴィルとデモクラシーの現在』 東京大学出版会 八月

二〇〇九年読書アンケート みすず 五七九号 一月

無題(なんとも豪華で贅沢な……) 演劇『式典』チラシ

京都芸術センター 一月

さらなる彼方へ 明倫アート 一一三号 二月

ひと、まち、文化—京都芸術センターへようこそ

地方議会人 四〇巻一〇号 三月

Around de deux types dégâté: quelques conditions d'un
débat multiculturel, Paul DUMOUCHET (s.l.d.), *National-*

isme et multiculturalisme en Asie, Paris, Harmattan

三月

富 谷 至

●漢字の中国文化(編著)

書体・書法・書芸術 — 行政文書が生み出した書芸術 昭和堂 四月

『漢字の中国文化』 行政文書が生み出した書芸術 昭和堂 四月

從終極的肉刑到生命刑 — 漢至唐死刑考 中西法律伝統 七卷 六月

書記官への道 — 漢代下級役人の文字習得 高田時雄編『漢字文化三千年』 臨川書店 七月

●国際討論会 東亜的儀礼與刑罰(二〇〇九年度 科学研究費

補助金基盤研究(S) 研究成果報告) 名古屋大学出版会 二月

●文書行政の漢帝国 名古屋大学出版会 三月

笞杖の変遷—漢の笞杖から唐の笞杖刑— 東方学報 八五冊 三月

永 田 知 之

郭沫若「卜算子詠梅」扁額始末 漢字と情報 一八号 三月

『杜家立成雜書要略』初探—敦煌書儀等との比較を通して 敦煌写本研究年報 三三 三月

目から入る中国古典詩—「練字」の系譜

●工具書について—漢籍の整理—(編著)

京大人文研附属東アジア人文情報学研究センター 九月

●工具書について—漢籍の整理—(編著)

京大人文研附属東アジア人文情報学研究センター 九月

書儀と詩格——変容する詩文のマニユアルとして

敦煌写本研究年報 四号 三月

『吟窓雜録』小考——詩学文献としての性格を探索の試み

東方学報 八五冊 三月

藤井律之

満と解——晋南朝の人事制度の再検討に向けて——

東方学報 八五冊 三月

藤井正人

●ヴェーダ文献伝承の研究——サンسكريット文献学と南アジア

地域研究の複合研究——（科研費成果報告書、編・共著）

共同と共有 人文 五六号 五月 六月

船山徹

漢字文化に与えたインド系文字の影響——隋唐以前を中心に

富谷至編『漢字の中国文化』 昭和堂 四月

●高僧伝（一）（共著） 岩波書店 八月

●高僧伝（二）（共著） 岩波書店 十一月

●高僧伝（三）（共著） 岩波書店 三月

梵網經諸本の二系統 東方学報 京都 八五 三月

古松崇志

従考古、石刻資料看契丹（遼）的仏教（姚義田訳）

遼金歴史与考古一 遼寧教育出版社 四月

契丹、宋之間澶淵体制中的国境（李済滄訳）

日本中国史研究年刊二〇〇七年度 上海古籍出版社 九月

東蒙古遼代契丹遺跡調査の歴史——一九四五年「満洲国」解体

以前（姚義田訳） 遼寧省博物館館刊二〇〇九

契丹・宋間における外交文書としての牒 遼海出版社 十二月

契丹・宋間における外交文書としての牒 東方学報 八五 三月

水野直樹

植民地期朝鮮における伊藤博文の記憶——京城の博文寺を中

心に——伊藤之雄・李盛煥編著『伊藤博文と韓国統治』

心——（韓国語版）イ・ソンファン、伊藤之雄編著 ミネルヴァ書房 五月

植民地期朝鮮における伊藤博文の記憶——京城の博文寺を中

心に——（韓国語版）イ・ソンファン、伊藤之雄編著 ソニン 七月

『韓国と伊藤博文』

書評 井上學『日本反帝同盟史研究』 大原社会問題研究所

紀要 第六〇八号 六月

比叡山で遭難しかけた話 人文 第五六号 六月

朝野温知（李壽龍）さんの歩み——戦前の著述を中心に——

身同 第二九号 真宗大谷派解放運動推進本部 七月

書評 井上學『日本反帝同盟史研究』 朝鮮史研究会会報

第一七六号 八月

Research regarding the History of Japanese Government Policies during Colonial Rule. Matsuda Toshiko ed. *Korea Under Japanese Rule: Past and Current Research Results and Issues for Future Research*. International Research Center for Japanese Culture. 十二月

「韓国合併奉告祭碑」の前で考える 思想 第一〇二九号 十二月

●京都と韓国の交流の歴史 第三集

拙著『創氏改名』に対する永島・宮田両氏の批判に答える 韓国民団京都府本部 十二月
朝鮮史研究会会報 第一七八号 三月

宮 紀子

モンゴル時代史の鍵を探して

日本学士院ニュースレター 明六社だより 三号 四月
Cultural Policy and Publishing Activities during the Mongol Period *JSPS Quarterly* No.28 七月

新発現の両種『事林広記』 版本目録学研究 一輯 十月

陳元靓『博聞録』について 汲古 五六 十二月

●『ユーラシア中央域の歴史構図 13～15世紀の東西』（共著）

総合地球環境学研究所 三月

東から西への旅人…移刺楚才——『西遊録』とその周辺

『ユーラシア中央域の歴史構図』 三月

東から西への旅人…常德——劉郁『西使記』より

『ユーラシア中央域の歴史構図』 三月

Tanksig namah の『脈訣』原本を尋ねて——モンゴル時代の書物の旅 『ユーラシア中央域の歴史構図』 三月

宮 宅 潔

書評 高村武幸著『漢代の地方官吏と地域社会』

正統か異端か——三国鼎立の自己主張——『二〇〇二—二〇〇七／環日本海講演会 記録集』 史林 九二巻四号 七月

秦漢時代の恩赦と労役刑——特に「復作」をめぐる—— 鳥取県立図書館 三月

東方学報 八五冊 三月

向 井 佑 介

ガンダーラ石彫——パキスタン・タレリ寺院址出土——

漢字と情報 十八号 三月

翻訳 許宏「書評 岡村秀典著『中国文明 農業と礼制の考古学』」 史林 九二巻三号 五月

ヴァイシャーリーにて 人文 五六号 六月

北魏の考古資料と鮮卑の漢化

東洋史研究 六八巻三号 十二月

北魏平城時代における墓制の変容 東方学報 八五冊 三月

麥 谷 邦 夫

吳筠事跡考 東方学報 八五冊 三月

森 時 彦

二十世紀における河北省新河県の自然村と戸口動態

森時彦編『二十世紀中国の社会システム』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 六月

●二十世紀中国の社会システム（編著） 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター 六月

河北省新河県の社会流動と戸口変化動向『近代中国の社会流動・社会控制と文化伝播—第三届中国近代社会史国際学術研討会論文彙編』中国社会科学院近代史研究所 八月
第一次世界大戦与中国棉紡織業の黄金時期 『危機与転機—対現実問題的歴史/反思論文摘要集』 北京論壇組織委員会 十一月

●日本京都大学中国研究系列之一『中国近代棉紡織業史研究』

社会科学文献出版社 一月
紡績系在華紡進出の歴史的背景 東方学報 八五冊 三月

守 岡 知 彦

upLaTeXを用いた多言語文献目録の組版

TeXユーザの集2009予稿集 八月

McCabを用いた古典中国語形態素解析器の改良 情報研報 2009-CH-84 十月

CHISE に基づくグリフ・オントロジーの試み
人文科学とコンピュータシンポジウム論文集—デジタル・ヒューマニティーズの可能性—情報処理学会シンポジウムシリーズ Vol.2009, No.16 十二月

upLaTeXを用いた多言語文献目録の組版

Jim-Hwan CHO et al. (eds.), *The Asian Journal of TeX* 3(2). 十二月

CHISE 文字オントロジーの Wiki 化の試み

東洋学へのコンピュータ利用 第21回研究セミナー 三月
古典中国語テキストの知識処理について 東方学報 八五冊 三月

矢 木 毅

高麗時代の私兵について 東方学報 八五冊 三月

安 岡 孝 一

人名用漢字の新字旧字「進」と「進」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月九日
人名用漢字の新字旧字「歩」と「歩」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 四月二三日
人名用漢字の新字旧字「禱」と「禱」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 五月七日
人名用漢字の新字旧字・特別編「人名用漢字以外を子供の名づけに使うには」

三省堂 ワードワイズ・ウェブ 五月一三日・

一五日・一八日・二〇日・二二日・二五日・
二七日・二九日・六月一日・三日

人名用漢字の新字旧字「滝」と「瀧」
三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月四日

人名用漢字の新字旧字「勺」と「勾」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 六月一八日

人名用漢字の新字旧字「萊」と「萊」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月二日

人名用漢字の新字旧字「桧」と「檜」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月一六日

姿と恣と盗 — 新常用漢字表字体の源流 —

第三回ワークシヨップ文字 七月一八日

人名用漢字の新字旧字「当」と「當」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 七月三〇日

拓本文字データベースとその応用事例

漢字情報と漢文訓読 八月二三日

人名用漢字の新字旧字「駟」と「駟」と「駟」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 八月二七日

英語における文字頻度とタイプライターのキー配列

英語教育 Vol.58 No.6 九月

人名用漢字の新字旧字「挙」と「舉」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月一〇日

人名用漢字の新字旧字「灯」と「燈」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 九月二四日

人名用漢字の新字旧字「亜」と「亞」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月八日

人名用漢字の新字旧字「島」と「島」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十月二二日

人名用漢字の新字旧字「遙」と「遙」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月五日

教育現場に負担、新常用漢字表 京都新聞朝刊 十一月六日

人名用漢字の新字旧字「涙」と「淚」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十一月九日

人名用漢字の新字旧字「琉」と「瑠」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月三日

新常用漢字表が迫る Unicode 移行、「シフト JIS」では対応

不可能 日経コンピュータ No.745 十二月九日

●新常用漢字表の文字論（共著）

勉誠出版 十二月

人名用漢字の新字旧字「叱」と「叱」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 十二月一七日

コンピュータ端末の元祖になった電信機「テレタイプ」

電子情報通信学会誌 93巻1号 一月

人名用漢字の新字旧字「沢」と「澤」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月一四日

人名用漢字の新字旧字「玻」は常用平易か

三省堂ワードワイズ・ウェブ 一月二八日・

漢字1文字が最大8バイト、Unicodeの「JIS」では

日経ITpro 一月二九日

人名用漢字の新字旧字「綰」と「綾」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 二月二五日

人名用漢字の新字旧字「仏」と「佛」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月一日

人文研所蔵16mm フィールドワイズとそのデジタル化 東洋学へのコ

ンピュータ利用第21回研究セミナー 三月一九日
人名用漢字の新字旧字「缶」と「罐」

三省堂ワードワイズ・ウェブ 三月二五日
「窓」字考 東方学報 八五冊 三月

山崎 岳

黄魚洄游在人間——從漁業、漁民的視角重新審視舟山歷史——

郭万平・張捷編『舟山普陀與海域文化交流』

浙江大學出版社 十二月

舶主王直功罪考（前編）——『海寇議』とその周邊——

東方学報 八五冊 三月

山室 信一

関係者 現代のことば 京都新聞夕刊 四月一七日

写真がつなぐ過去と現在 『秘蔵写真が語る戦争』

朝日新聞社 四月

六二年目の憲法と世界

東京新聞・中日新聞夕刊 四月三〇日

國民帝國日本的異法域統合與差別 臺灣史研究 第一六卷第

二期 京都新聞夕刊 六月一八日

國民投票法 現代のことば 新宿紀伊国屋 特別選書録 七月

戦争と人間そして非戦 京都新聞夕刊 八月一三日

記憶遺産 現代のことば 岩波文庫

●明六雜誌（中野目徹と共編・校注・解説）下巻 岩波書店 八月

繋ぐものと距てるもの——ナシヨナリズムとデモクラシーの

環 未来 五一六号 九月

国慶節 現代のことば 京都新聞夕刊 十月二一日

アジア主義と日中関係 陶徳民・藤田高夫編『東アジアの過

去、現在と未来』 関西大学出版会 十月

使用上の注意——『明六雜誌』復刻を終えて 図書 七二九

号 十一月

脱米入亜？ 現代のことば 京都新聞夕刊 十二月一五日

●キメラ—滿洲国の肖像（ハングル版） 十二月

転形期東アジア——日本は何をなすべきか

熊本日日新聞 一月一日

「核なき世界」へ問われる一年

神奈川新聞など一九紙 一月

東アジアにおける人流と思想連鎖 遼 三四号 一月

多而合一の秩序原理与亜洲価値論 吳志攀・李玉編『東

亞的価値』 北京大学出版社 一月

安重根 現代のことば 京都新聞夕刊 二月一七日

繋ぐものと距てるもの 田中浩編『ナシヨナリズムとデモク

ラシー』 未来社 三月

近代日本の国家形成と学知の意義 國學院大學研究開発推進

機構紀要 二号 三月

横山 俊夫

忘れものに気づいて戻った旅 ひととき 九卷四号

株式会社ウエッジ 四月

●文と武——第二六回08比叡会議報告書（趣意書執筆、共編）

日本アイ・ビー・エム株式会社 四月
おことわりと訂正 京都マスニー「コールデン・エイジ・アカデミー」三〇〇回記念特別企画講演録画と映画上映「第一部 横山俊夫「老いて楽しみを増す」具原益軒『楽訓』から」（平成一九年一〇月一二日講演）上映時配布

京都市生涯学習振興財団 十月一八日

●三才学林へ宮林へ策を求めて（編著）

京都大学大学院地球環境学堂 三才学林 十月
Editorial (by Richard SMITH), *Ethics and Education*,
Vo. 4, No. 2, October 2009. (Major parts are quotations
from Toshio YOKOYAMA's address, at Kyoto University
Clock Tower on 9 August 2008.) 一〇月
京都の学風 京都大学人文科学研究所創立80周年（所報 人
文 特別号） 十一月

●*Sansai, An Environmental Journal for the Global Community*, Tracey GANNON and Toshio YOKOYAMA (eds.),
No. 4 十二月

Shimadai-juku (by Kenji YAMAMOTO, in collaboration
with Tracey GANNON and Toshio YOKOYAMA) *Sansai* No. 4. 十二月

●*Report of the 9th Project Evaluation Committee*（共同作成、
第九回研究プロジェクト評価委員会報告書）

Research Institute for Humanity and Nature（総合地球
環境学研究所） 一月

●嶋臺塾記録 第五冊（企画・編集・後記）

京都大学大学院地球環境学堂 三才学林 二月
Even a sandline's head becomes holy: the role of household encyclopedias in sustaining civilisation in pre-industrial Japan, Sansai, No. 1 (2006), with the author's amendments and a note. KURENAI / Kyoto University Research Information Repository（電子版）訂正補遺添付） 三月

人

文

第五七号

二〇一〇年六月三十日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品